明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十六年十二月二十七日印刷納本
昭和十七年一月一日發行（毎月一回一日發行）
第五百六十二號

目次

三教の特色と其調和（上）……本多日生
信仰の確立……小林一郎
本佛實在の宗教哲學（七）……河合陟明
知恩報恩……守屋貫教
國を護る心組……板本宮
優婆塞戒經要解（其五）……本多日生
記事
○本部團報　○福島支部報　○萩教信　○入帳報告

第四十七年　一月號

統一

財團法人　統一團發行

勝鬘師子吼經講座

現時局に最も大事な精神の榮養素！
古來鎭護國家の妙典と稱歎された本經を左の通り開講、各位萬障を排して御來聽あれ。

講師　中央大學教授　小林一郎先生
日時　一月十七日土曜日以後　毎土曜日午後二時
場所　本部統一會館

三教の特色と其調和

本多日生

一、序言

今日は地明會の新年初會でありまして、本年も毎月滯りなく本會を開催致したい希望を以て居るのであります。新年の初會でありまするから殊更大切の事柄をお話申上げて見たいと存じまして、此處に記しました『三教の特色と其調和』といふ事柄を申上げようと思ふのであります。三教と申すのは神・儒・佛の三教を指すのでありまして、惟神の教と、聖賢の教と、佛陀の教、此三つが我國の文明を造り來つた中心の思想であります。我國は建國以來二千六百年に及んで居りまするけれども、初めの頃は文明が簡單なものであつて、思想といふやうなことに就て大して研究する必要がなかつたのであります。奈良朝時代に及んで聖德太子の頃から此神・儒・佛の三教が發達を致しまして、そこに日本の文明は豐富な進歩を遂げたのであります。所が其文明が開かれて行く出發點の所に聖德太子の如き偉大な方が御出になつて、さうして此三教の調和を唱へられたので、即ち三教の特色と其調和と

いふことが聖德太子の主張であつた、之を一言に『三教鼎立』と申して居りますが、鼎の三本脚で立つて居るが如くに、此三つの教が相倚り相扶けて立つて行くのであつて、それによつて文明が健全に造り成されて、隨つて日本の國家も發達をするといふことを、聖德太子は力說されたのであります。で此鼎立といふことの意味を考へると、鼎の三本の脚はそれぞれに獨立して居るものであつて、さうして三つが相倚つて鼎其ものを維持して居るのである、丁度三教の各々の特色と其調和といふことが此鼎立といふ簡單な二字の中に含まれて居る次第である。此思想は爾來千三百七十年の日本の文化史を傳うて今日に及んで居る最も大切な思想と思はれるので、私共は之を日本文化史の中心思想・正統思想と考へて居るのであります。所が明治維新の前からして此三教が分離致したのである、さうして其間に反目衝突をするに至つて、今日尙ほ宜い工合に三教の調和が取れてゐないのである。現在の日本文明は非常に進步發達して居る如くであるけれども、此三教の各々の特色を適當に認めて、而も三教の調和を考へて行くといふ文明の構成になつてゐない、文部省始め日本文教の方針がそこに行つて居なかつた。それが爲に日本の思想界は非常な動搖を來たして、今日（昭和三年）の如くに人心の頽廢、思想の惡化といふことになつたと思はれる。勿論一つは外來思想の影響であるけれども、假令外來思想が如何に惡いものであつても、自分の國にしつかりした此三教の思想が徹底して居つたならば、其影響を受けるものでなかつたのである、自ら立つ所が弱かつた爲に外からの影響で動搖を始めたものである、唯だ西洋の文明をどうする斯うするといつて騷いだばかりでは今後と雖も日本人の思想は安定を告げるものではない、內に歷史的の文化史を辿つて、そこに正統思想に戻り、さうして外から來る思想を適當に取捨按排して、玆に始めて健全なる文明が成立つのである。縱の文明と橫の文明に就て調節を圖らなければならぬが、併し先づ縱の文明が根本である、自分の國の歷史的文明を明かにして而して外世界的思想の攝取を適當にしなければならぬものであると吾々は思ふのである。

そこで日蓮主義者の立場は、從來は多くの人の間に何だか佛教の中の一宗派で、頑迷固陋な或は迷信雜駁な取るに足らないドンドコ法華のやうに考へられたけれども、それ〳〵の人の努力によつて、今日では日蓮主義は佛教の中に於ては最も健全なものである、さうして外社會の思潮に對しても相當の位置を占むるものだといふことの認識が起つたので、是はお互日蓮主義を奉するもの〻洵に慶賀に堪えない所であります。併し今尙頑迷な考を辿つて居る者も尠くないのでありますが、我が統一團の如きは他に先んじて其覺醒を促し、以て今日に至つたのであります。故に正しき意味の日蓮主義は其守る所は頗る堅實であるけれども、其思想觀念は極めて濶大なもので、決して頑迷なものではない、最も濶い正しい精神を有つて、而も其信念は鐵石の如く堅實であらねばならぬ、斯くて思想上の模範者を以て任ずる所に、吾々の自尊心は生きて居るのである、其意味に於て今日は此問題を御紹介申上げようと思ひます。尤も先年大師號追賜の際に、吾々同志が朝廷に奏上致した時に日蓮聖人の御德を

申上げたのでありますが、其中に此日蓮聖人は三教各々の特色を發揮すると同時に、其調節を圖る人として、其等の系統の中に於て最も力强き働をした人だといふことを奏上したのであります。世俗の考へる居るやうな日蓮聖人が頑冥不靈であつたならば、立正大師の諡號は戴かれなかつたであらうと存じます。それで皆さんが此信念を確立せらるゝに就ても、其信念は固いものでなければならぬけれども、其外に思想としては非常な濶い大きな正しい意味を持つて居るものだといふことを、能く能く了解して、あれは信心し出したけれどもへマなことにならなければ宜いがと云つて他から心配して貰ふやうなことにならないやうにしなければならぬ。最近にも或る人が熱心な日蓮主義者になつた爲に、親類では彼を氣狂ひになつた精神病院に行かなければならぬといひ、嫁の里からは嫁は離緣をして戻してくれと云つて騷いで居ると云ふ、能く〳〵調べて見るとそんなでもないが、信心する方が一本調子で突張るのに、他は宗教の何たるを知らない人達であり、兩方が諒解し得ないのである。さういふことは大にしては日本全體に禍ひする、教界の爲にも禍となり、小にしては家庭にも個人にも禍ひする。斯ういふことの起らぬやうにして、文明の創造に貢獻しなければならぬ。そこで吾々はさういふ病弊を成るべく救ひたいと心配して居るものであります。

我國の文化史を通觀致しますれば、先に申す聖德太子を始めとして、其思想はずつと朝廷に及んで居つた、我が朝廷に於かせられては神・儒・佛の三教何れも尊崇せられて居つたのであります。

所が江戸の中世期から明治にかけてそこに變調を來たし、今尙御講書始に於ても和書・漢書・洋書といふ三つになつて、佛書の御講書が出てゐない、大體御講書の式は何處から起つたかといふと、聖德太子が宮中に法華經を講じ維摩經を講じた佛書の御進講が起原である、其の最も有力なるものは法華八講と稱し、長い間朝廷の大禮として行はれ、法華經に關する事柄を總てえらい坊さんが寄つて話合つた事であつたのであります。然るにそれが取殘されて、今日は佛書は御進講申上げないことになつて居る、これは早晩復興せらるゝ日があるべきである、否あらねばならぬと自分達は思つて居る。まだ〳〵日本の思想界はさういふ點から見ては順調には還つてゐないのであります。夜が明けたぢらうかといふけれども明けてはゐない、まだ午前三時ぐらゐで鷄の啼聲は聞えるけれども天地は眞つ暗といふ所である。若い人は生きて居るうちには五時となり六時となつて行くかも知れぬけれども、年取つて居る者はやはり暗い裡に死んで行かなければならぬのぢやないかと思ふのである。それは朝廷ばかりぢやない、一方では思想界にえらい人が段々出まして、奈良朝には菅原道眞、それから平安朝になつては傳敎大師・弘法大師其他さういふ思想界の偉人が澤山出たのである、それから鎌倉時代になつても日蓮聖人、建武中興の頃には北畠親房卿、室町時代には一條兼良公、江戸時代の初めには德川光圀卿、さういふ人は五百年千年に一人出る位のえらい人である、一通りの學者とか人物とかいふのとは違ふ。江戸時代に出た林羅山だとか伊藤仁齋だとかいふやうな貧乏儒者とは違ふ、光圀卿

であるとか、親房卿であるとか、傳教大師、聖德太子といふやうな人は不世出の偉人であつて、一通りの學者などゝいふやうな人とは違ふのである。さういふやうなえらい人は皆三教調和の精神に働いたからして、日本の民間の思想といつても皆三教調和の觀念を持つたのである、其の廣く及んで居るのは全國的であるからして、すつと町村に及んで居る譯でありまして、町人でも百姓でも總て悉く此觀念を持つて居つた、士農工商の中に於て農工商の階級が大多數である。士は僅かであるが、農工商一般國民何處の家にもお佛壇もあれば神棚もあれば、又論語や大學は大切なものだと思つて居た、聖人賢人の教・我國の神樣・佛法の佛樣・皆有難いものだとして居る、お佛壇があるから論・孟・學・庸は燒いてしまへといふ、そんな者は一人も居らない、一般民衆の思想信念は三教の觀念で維持されたものである。而してそれは長い間、奈良朝から平安朝、鎌倉時代、室町時代を經て江戸の中世まではちやんと三教融合で來たのであるが、途中に儒教の方から佛教排斥の學者が出て來、神道の方からもそれが出て來てゴタ〳〵を始めた。其時に天海僧正が出て來て上野を開いた、さうして一旦其時に落着を告げたから德川の勢力のある間は排佛といふことは出來ない、德川は上野を建て、又增上寺を興し佛法を保護した。それで人別はお寺が支配して居つた、人が死んでもお寺で認めなければ葬ることも出來ないし、一寸旅行するにも宗門の何宗に屬するといふことが極まらなければ旅行することも出來ない、一方はキリスト教の取締の爲に、一方は世間の取締の爲に坊さんの手によつて總ての家庭は調査されなければならぬ。それで役人も一般の事務としては町奉行があり、宗教に關するものは寺社奉行があつて、特別な權威を持つて居た。

さういふ次第でありますから、聖德太子を始めとして歷代の皇室皆佛教を深く御崇敬になりまして、排佛の觀念の御方はゐらつしやらぬ、外の國では一旦王樣が信じても後に出る王樣が廢佛をやる、支那などは何遍もやつて居る、佛法歸依の王樣と佛法嫌ひの王樣が出て來て幾度もやつて居るが、日本は佛教渡來以後一度も排佛はない、日本のどの　天子樣が佛教を嫌ひだと仰つしやつたといふことはない。明治維新の時には廢佛論が出たけれども、朝廷から出たものでない、薩摩の武士や其當時の書生ッポなどの、思想問題に全く知識も理解もない人達が唱へたのである、後には元老といふことになつて此頃まで生きて居つた山縣・伊藤・大久保などゝいふ人は高い位置になつて、頭も禿げたけれども、明治維新頃には書生ッポといふものは元氣は宜かつたけれども、學問の方は少ししか知つてゐなかつたので、佛法の事など何にも知つて居るのぢやない、知らないで廢佛毀釋といふやうなことを唱へた。それが勢力を得て相當の位置になれば政治の事や國家の事が忙がしいから佛教の書物などは終に見ない、死ぬまで一枚も開けることが出來ない、元の無知識で頭が禿げて行く、身分だけはえらい、それであんなえらい人が佛法の惡口を言ふと思ふが、さうぢやない、何にも知らない禿頭である。さういふ者が今日まで日本の支配階級として大勢の者を支配する所に居た、丁度雀

を網に掛ける時分に烏の脚を括つて二三羽置いておく、さうしてそれに餌をやつて置くと烏が喜んで食ふ、雀がそれを見て烏が網があつても安心して食つて居るから恐いことはないと思つて安心して來る、百羽でも二百羽でもパッと捕られる、伊藤・山縣などゝいふ人は丁度足を縛られた烏で佛法に就ては何にも知らぬ烏である、所が國民がそれを見て安心して、烏があんなやうにやつて居るから佛法などは要らぬといつて、今言つた雀の態度でやつたので百羽二百羽網に掛つたのが、今日の日本國民の馬鹿仕のない有樣になつた所以である。そんなことは私が言ふまでなく日本の國民は今日は知らなければならぬ。斯んなことは上野の山に西郷の銅像があるといふことを知つて居るくらゐな話である、千三百年來日本の國民思想の中心となつて精神文明を成して來た三教の調和を明治以來破壞した爲に斯うなつた、破壞したのは時の書生ッぽで何にも知らない連中であつたといふやうなことはすぐ分かることである、浦賀にアメリカの黑船が來た時分に日本が慄へ上つてまごついた、其當時に於ては一隻の軍艦の爲にも人心恟々として爲す所を知らなかつたといふ時代である、其時の書生が佛法に就て無知識であつたといふことは何の不思議もないことである。けれどもそれが今日まで訂正されずに來て居る、船の方は大きな蒸汽船も出來澤山の軍艦も出來たけれども、佛法に對しては其儘である、砲臺の方は品川灣に石を投り込んでお臺場を拵へて大砲も据付けることが出來ずして德川は倒れたけれども、今日は立派な要塞が必要な箇所にはそれ〳〵出來て、澤山な大砲を据ゑて國防は立派に出來たけれども、佛法に對しては品川灣にお臺場を拵へて大砲一門据付けなかつた時の儘で來て居る、砲臺が遊園地にならうといふ今日、其當時の儘の佛教觀であるから洵になさけない、今頃そんな佛教觀で日本の思想を考へて居るのは、丁度今日お臺場があるから國防は大丈夫だといつて瓢箪で酒を飲んで居る馬鹿と同じである。今日本の思想界に就て三教の思想を按配し得ないといふことは、これ位國家の損失はない、聖德太子が此三教を協力して行かない時には日本の社稷危しといふことを仰せられたが、全く仰せの通りになつて行く譯である。これは家庭に就てお考になつても直ぐ分るので、此三つの思想觀念を融合して居るやうな人でなければ、本當の立派な家庭とは言へない。所がこれは今申す儒者の方では德川の中世に朱子學者などが出て來て廢佛思想を唱へたので、神道の方に於ては江戸の古着屋の主人で唯一神道といふものを唱へた吉川惟足といふ者が排佛論を盛んに唱へた、なか〳〵これが策略のえらい奴で德川へ取込んで佛法を倒さうとした。それから外にも神道から排佛論を生むに至つた、平田篤胤とか度會延佳とか云ふ神道の人は割合に頑固である、佛教の方に於ても偏つた觀念のものが出た。淨土門の人は唯だ阿彌陀樣さへ信じたら此世はどうでも宜いといふ、此世はどうでも宜いといふ中には此國といふことを含むから、此國もどうでも宜いといふことになる、此世を輕く見ることは現實一切を輕く見ることであるから、さうすると聖人の教、惟神の道とは一致しなくなる。禪宗の方も悟つたやうなことを言つて、超世間超國家といふことを餘りに言ひ過ぎたり、超倫理を言

ひ過ぎたりする所に、佛教と神・儒二教と一致せぬ點が生ずる、それは儒教の方に於て云へば朱子學などが最も狹隘であつたし、神道では今言ふ唯一神道或は復古神道は狹隘な觀念である、佛教では禪と淨土のやうな、道德を輕んじたり國家を輕んじたりする所から衝突が起つた、それは弊と弊との衝突である、之を純粹の惟神の教に戻し、聖人の教に戻し、佛の教に戻して考へた時はどうかといふ點が大切である、嫁と姑とは喧嘩すべきものかといふと、喧嘩すべきものではないけれども、姑が非常に性が惡い、嫁も亦强情である、亭主も親の所へ行つては色々嫁の惡口を言ふ、嫁の所へ行つては色々姑の惡口を云ふといふ工合であれば、喧嘩は絶へない、それは弊と弊との衝突である。日本の文明を論ずるに就ては弊を見てさうしてそれが爲に驚いてしまふてはならぬ、今私の語らんとするのは其の純粹のものであつて、神道の方に於ては純神道である、鈴振神道ではない、俗神道ではない、皇祖皇宗の精神を繼いで居る所を云ふのである、堂々として發展して行く皇祖皇宗の御教を云ふのである。儒教も純粹なるものを云ふので、朱子學の末流ではなくして、聖人の教の純粹なるものを見て行く。佛教も禪宗や眞宗のやうに、此世はどうでも宜いといふやうな佛教を見てはいかぬ、純粹の佛教は釋尊の御精神によつて傳はつた一切經が儼存して居るのであるから、此本當の佛教から考へて行かなければならぬ。そこで其場合に於ては三教各々特色があつて、さうしてそれが又他面に立派なる調和を保つて行くことが出來る、お互に尊敬を交換しつゝ協力して行くことが出來る、これが本當の見方であり、我國文化の正統思想である。

信仰の確立

小林一郎

これは昨秋本部に於けるお話の大要であります。時節柄一段と意義深いものがありますから、御精覽と勸發あらんことを念上ます。（文責在記者）

今日はお會式をお營みになつた次第でありますが、毎年のことでありますけれどと、斯ういふ特別の場合になりまして、いつも私共は新しく信仰の必要を感ずる譯であります。殊更昨今世の中が非常に切迫して參りますと、餘程しつかりした覺悟を持たないと、この難かしい所を越えて行くことは困難であらうかと思ふのであります。併し又例へば前歐洲大戰後のドイツなどのやうに、本當に國中の者が皆苦勞するといふ時であれば、お互こだからどんな苦勞も忍べるといふことは誰も考へられるのであります。日本は今實際大事な時であるにも拘らず、國民の生活狀態の間に大分違ひがある。一方に於ては實際生活に困つて居る者があるし、又一方に於てはかなり樂な生活をして、贅澤と言つて宜いくらゐな生活をして居る者があるやうな狀態であります。これはマア斯ういふ時代に於ては已むを得ないことでありませうけれども、併し人情としては皆が苦勞するならどんな苦勞も出來るけれども、向ふの方が贅澤をして居るのに、自分一人儉約するといふことは、どうも不平だと言ふのも已むを得ない。又仕事でもその通りで、皆が忙しいなら一生懸命にやるけれども、閑な人があるのに自分だけ忙しいのは馬鹿々々しいといふやうな感じも起る。これは佛樣か菩薩でない以上、凡夫であれば免れない所であります。

それであるから普通學校などで教へるやうな倫理道德を以て、本當に人々の心からの愛國心を鼓舞するといふことは非常に難かしくなつて來て居る。こゝが何としても宗教的の信念に依らなければならぬ場合であらうと思はれるのであります。

私は今年の夏支那を一通り見て參りましたけれども、なか〳〵支那だけでもその全體が日本に信頼するといふことは容易に望めない。兎に角日本は今彼の地に於て戰をやつて非常に勝つて居るが、併しながら日本の今勢力の及んで居る範圍は極めて狹い、而もこの支那の人間の八割乃至九割を占めて居るものは農民でありますが、その農民は殆ど教育がない。百人の中で一人か二人しか自分の名前の書ける者はない。無論新聞なども讀めない。私もあまり深入りはしませぬが、ちよつとした農村に入つて百姓を相手に話して見ると、百姓は全く戰の成行きに就いては何も知らない。眼の前で戰がある所のものは多少知つて居るが、少し遠ざかつた所の者は知らない、一體戰はどつちが勝つて居るのか、敗けて居るのか知らないといふやうな狀態で、それが大多數であります。斯ういふ者に向つて、日本と手を携へて、共に東洋の平和を建設しろと言つても、そんなことはわからない。まるで自分達と緣の無いことのやうに思つて居るのであります。

一體支那の人間は利害損得の打算に非常に明るい國民であつて、マア特別の教育を受けた者は格別、普通の者であれば、國はどうなつてもかまはない。國の政府を誰が占めて居らうと、外交關係がどうなつて居らうと、そんなことはてんで考へはしない。日本の人はマアさういふやうな所はなか〳〵偉いので、チト神經過ぎるかも知れないけれども、電車の内などでも、やれアメリカがどうだ、イギリスがどうだ、ドイツがどうだとやつて居るけれども、支那の百姓はアメリカもイギリスも何もありはしない。たゞ自分達の生活が樂に行けば宜い。たゞそれだけのことであります。それに就て面白い話があるのは、支那で日本の中等學校の先生が支那の青年を集めていろ〳〵な話をした時に、日本の武士のことを說いて、日本の武士といふものは國の爲には私を忘れて働くといふ特色がある。殊に楠正成の如きは河内の國に澤山の領地を持つて居つて、多數の人民を從へて樂しく暮して居る。だから河内に引込んで居れば生活が樂であるのに、吉野の天子の爲に忠義を勵んで、到頭一族皆討死して死に絕えた。これは日本武士道の特色なりといつて、非常に熱心に話した。さぞ皆感動しただらうと思つて期待して居つたところが、話が濟んで一人の青年がひよつと立つて『質問があります。その楠正成の一族が死に絕えたら、その廣い領地や遺產はどうなつたでせう』と言つて聽いたので、その先生も聞いた口が塞がらなかつたといふ話があります。これはまるで考へが喰ひ違つて居るから仕樣がない。私なども子供の時から楠正成の忠義な話を幾度か聽いて居りますが、楠正成の遺產がどうなつたか考へたことはない。ところが支那人としては大問題です。斯ういふやうな人間を相手にして四億の人間も皆日本に歸伏させようといふことは容易なことではない。それは幾ら彼等に東亞の爲だ、世界の爲だと言つても、自分達の毎日の生活が裕かにならぬ限りは、日本が有樣いとは思はない。これは仕方がない。ところが今この戰で以て物價は高くなつて居る、物に依つては二倍、三倍になつて居る。だから農村邊りでも米や麥は自分で作るけれども、鍋でも鍬でも茶碗でも土瓶でも皆都會から仕入れるから、さういふものは二倍、三倍になつて居る。さうすると農村は非常に苦しい、それは何故苦しいか、戰の爲だ、戰を日本が始めたからだと思ひ込んで居る。新聞など見ないのであるから、蔣介石の宣傳に依つてさう思ひ込んで居る。それであるからどうしても日本人が彼等を保護して、彼等の生活を樂にしてやらない限りは、支那人といふものは日本人を相手にしない、又政府の當局にどんな偉い人が居ても、それとすべて液交渉の生活をして居るのが七割、八割でありますから、どうも仕方がない。私共は素人料簡だけれども、蕪湖といふ所から農村に入つていろ〳〵百姓に聽いて見ると、三百年來の昔の形で百姓をやつて居る。少しも改良などやつて居ない。だから日本人があゝいふ所に行つて彼等の農事を改良さして、生活を樂にしてやつたら餘程宜いと思ふ。これは實は素人考へでありますが、私は大使館に行つて話したら、それは自分達も氣が附いて居るのだが、まだ手が廻らないのだと言つて居りました。御存じのや

うに日本内地のことを考へて見ましても、研究をするとしないとで、大變な違ひがあるといふことが直ぐわかる。例へば天保八年に大鹽平八郎の亂がありましたが、あの時は米が足らないといふので、大阪で暴動が起きた。あの時に幕府の方でも、あの騒ぎが鎭まつた後、日本中の米の在り高を調べた書附けがありますが、天保八年に全國の米の在り高が三千萬石で、今の半分であります。今では能く出來る時には六千萬石以上獲れる。今年あたり大分出來が惡いといふが、それでも五千五、六百萬石穫れる。さうすると天保八年より倍穫れて居る。これはやはり研究の結果であります。農事改良をいろ〳〵やつた結果倍穫れて居るのであるから、支那だつてそつくり日本の通りには行くまいけれども、大いに知識を與へて收入を增さしてやれば、そこで始めて支那人も、成程日本人は有難いと思ふでせう。又支那では大分棉を作つて居ります。棉に就ては私は素人でわからぬから專門家に向つて『どうだらう、支那の棉は質が粗くて、アメリカの棉のやうに細いものに使へないといふことだが、どうしても駄目だらうか』と言つて尋ねたら、その專門家は『それはさうでもない。アメリカの棉を支那で栽培さして、兩方の混合種を作つたら餘程良くなるが、それは日本人がやるより外に方法はない。これは將來日本人のやるべきことだ』と言つて居りました。これは他の二、三の專門家に就いて聽いたら皆さう言つて居りました。その他さういふことは幾らもあるので、日本人がたゞ『今や東洋の平和は……』といふやうな理窟ばかり言つて居ないで、實際支那の農民を親しく指導して、彼等の生活が日本のお蔭で樂になつたといつて感謝するやうにしてやらなければ、たゞ役人だけ幾ら活動しても、又東洋の平和は……といふやうなことを幾ら言つて見ても、理窟だけでは支那人はなか〳〵容易に動かぬ。だから重慶が落ちたら戰が濟むだらうといふやうな、そんな夢を見て居つても、それは當てにならぬ、重慶が落ちたら又他に都を遷すに決まつて居る。殊に今蔣介石の引込んで居る四川省といふのは、昔の蜀といふ所で、物資の裕かなことを以て昔から有名な所だから、彼處にどつしり尻を落附けたらなか〳〵兜を脫がない。これを見て取つてアメリカやイギリスが助けるので、アメリカやイギリスは東洋の平

和を望んで居る譯ではない。たゞ蔣介石を助ける方が自己に都合が好いからさうやつて居るだけのことであります。

斯うなつて見ますと支那事變を片附けることは容易なことではない。況して世界大動亂の影響を受けることが今日の如く甚だしくなつて見れば、日本が本當に安心する時がいつ來るかといふと、前途遼遠でありまして、なか〳〵見透しが附かない。その苦しい中に於て前に申上げるやうに軍需工業が非常に隆盛であつて、少し腕の良い人はずん〳〵收入が殖える、これは決して惡い事ではないが仕方がない。この間も私の側の國民學校の校長先生からいろ〳〵な話も聽いたが、『いや、どうもこの頃は不思議なことで、私の方の學校を卒業して、今或る工場で働いて居る青年で十九歳になるが、非常に腕が良いので、この頃は日に七圓取ります。私より餘程上です』と言つて居りましたが、これは仕方がない。斯ういふ例は幾つもある。斯ういふ非常の時であるから、さういふ人が働いて呉れなければ戰は出來ないから、ナニモ腕の良い人がうんと取るのは惡くはないけれども、さういふ事情であります。さうすると『彼奴は十九か二十で月に二百圓も取る、俺は頭が禿げるまで働いてまだ百圓そこそこだ、何だ馬鹿々々しい……』となつて來る。これは人情であるから仕方がない。それから又人間が出世をするのでもその通り、お役所に勤めても、役所の都合に依つて昇進の速いと遲いとあるのは已むを得ない。今の人手が足らないといふ時代には、下の人をぐん〳〵引上げて出世をさせなければならぬ。又兵隊に行つ居るのでもその通りで、第一線に行つて居る者はだん〳〵戰死する人もあるから、下の者を引上げてそれに充てなければならぬから直ぐ少尉、中尉、大尉になる。ところが內地の隊に居る者はそれほど引上げる必要はないから、いつまでも同じだといふやうな譯であります。これは仕樣がない。斯ういふ非常の場合には已むを得ない所で、世の中はどうしても不平均になる。收入に於ても不平均、昇進に於ても不平均、不平均といふことが人間の心を險惡にする。そこでこれをたゞ普通の倫理道德で、人間と生れた以上は國家の爲に力を盡すのが人の道だと言つて見たところが、同じく一生懸命働きながら儲ける者と儲けない者と

出來て來るから、儲けない奴は何だ馬鹿々々しいといふことになる。そこは非常に難かしいので、これはなかなか學校の倫理道德では追付かない時が來たといふやうに私などは思ふ。

マア私の行つてゐる中央大學などでも、大勢の學生に對して勉强しろ〳〵と言ふ、心懸けのよい者は勉强するけれども、心懸けの惡い者は、何時どうなるかわからない、だから勉强しても大して效き目があるかどうかわからない……斯ういふ料簡の者がある。斯ういふのがうつかりすると享樂氣分になる。どうせ戰に行くのだから、東京に居る間に映畫の一つも見て置かうといふ風になる。これはどうも小言を言つて見てもなか〳〵難かしい。私などは隨分古い人間ですが、私共の學生時分には贅澤しようなどと思ひはしませぬ。學生の時はナーニ何でもかまはない、世の中に出て相當な收入があるやうになつたら、その時になつて芝居にも行かう、山登りでもしよう、斯ういふやうなことでありますが、この頃は何時どうなるかわからぬから、今の內に親父に金を出さして溫泉にでも行つて置かう……ちやうど逆であります。併しこれをたゞ小言を言ふ譯に行かない。どうも社會が複雜だから、若い人がさういふ氣分になるのも又已むを得ない。

斯ういふやうに社會がこんがらかつて居る場合に、たゞ一通りの倫理道理で人々を健全な道に導かうといふことは非常に難かしい。理窟は理窟でわかつて居るけれども、その理窟がなか〳〵實行されないやうな問題が混亂して居る狀態になつて居るのでありますから、斯ういふ時はなか〳〵難かしいのであります。ちよつとした事でも問題がこんがらかつて居る。例へばこの頃電車が込んで仕樣がない、成べく皆出ないやうにしたら宜いではないか、婦人が買物に行くのでも、毎日行くのを三日に一度ぐらゐにしたら宜いではないか、さうすると電車の混雜が大分緩和される、斯ういふことを當局の方は仰しやる。成程御尤でありますが、それがなか〳〵實行出來ない。何故なら大きい商店では配達しなくなつた。さうすればやはり毎日出て行くより仕樣がない。さうすると自然と電車に乘る人が殖える。電車に乘るのを減らして呉れと言ふけれども、減らせば家の者が腹が空つても食へ

ないといふことになる。仕樣がないから毎日電車に乘つて買出しに行くといふことになる。こんなどうしたら交通を緩和することが出來るかといふ極めて簡單な問題でも、やつて見ると簡單に行きはしない。世の中の事は皆さうで、一つの問題を解決しようと思ふと、他の問題が始終絡んで來る。結局何が何だか譯がわからないといふことになつて行くのであります。實に困つたことであります。

こんなやうな狀態であるから、そこでどうしてもなか〳〵無理なことだが、人々が自分を捨てるといふ氣分をもつとしつかり持つより仕方がないのであつて、銘々の立場から銘々の理窟を言へば、皆理窟がある。そこで出來るだけ自分を捨てる、自分を犧牲にして、自分の都合を離れて物事を考へるといふ心持を養はなければならぬ。それが本當の宗教心であります。佛樣の大慈悲のお心持を吾々の心持として、菩薩が一切衆生の爲には身を苦しめても敢て厭はんと言つて努力したその跡を吾々の手本とする。斯ういふ風に考へて皆が己れを捨てるといふことに努力する。これはたゞ理窟ではない、實際所謂菩薩行と言はれることを人々が自ら率先して實行しようといふ心持を作らなければならぬ。先づこれを銘々の家の內で作らなければならぬ、銘々家の內で五人なり六人なりがお互に申合はせて、お互に勵まし合づて、どうだ、お互に斯ういふ場合だから、銘々の私を捨てようではないか、苦しくても辛くても自分を犧牲にしようではないかといふやうに、もう地味に眞面目に銘々の家の內からその氣分を作つて行かなければならない。これが今の時代を救ふ上に於て極めて大切なことであります。今の場合を救ふのには大掛りの運動などよりは、地味に眞面目に、銘々の家の內からさういふ氣分を作り上げるといふことに最も力を用ひなければならぬ。これが出來なければ、それは隨分難かしい問題で、國が本當に立たぬ時が來るかも知れない。なか〳〵これは大切な時であります。

ちよつとした例を言ふと、この頃防空壕を作ることが流行る、私の近邊でも五十人ぐらゐ這入れるのを作つた。ところがこの間通知があつて、防空壕を折角作つたから、彼處へ入つたり出たりする練習をしなければならぬかう皆出て來いと言うて來た。私は行かないと言つて斷つた。

すると『何故出ないか』と言ふから『僕は爆彈が落ちた時に壕の内に入らない、僕の體は壯健だから、爆彈が落ちたらそこらに火が飛ぶだらうから、それを消す爲に僕は働く、そんな時に壕の内に引込んで居られるものではない。僕はどうしても引込まない、引込まなければ練習する必要もない。だからこんな大事な時に壕の内に潜り込んで土鼠のやうな眞似をする者は日本人にはない、僕は日本人だからそんな馬鹿なことは出來ない』と言つて、僕は斷つた。するとその人は『あなた金を出したでせう』と言ふから『それは僕も金を出したが、それは趣意が違ふ。あれは足腰の立たない病人等は避難するより仕方がないから、その爲にあゝいふものに入れて置く。又生れたばかりの赤ん坊を抱へた婦人はこれもどうも仕様がない、やはり防空壕に這入らなければならぬから、金を出したので、自分が入らうと思つて金を出したのではない。そんなことを間違へては困る』と言つたら『わかりました』と言つて歸つて行つた。さういふ譯で私は防空壕を作ることは贊成したけれども、自分は這入らないと決めたのでありますが、こんな問題でもちよつと引掛る。贊成したといふと壕の内に這入れといふことになる、這入らないと何故贊成したかと言ふ。面倒くさい、一通り釋明しなければ承知して呉れないといふ譯であります。事毎にさうした問題は後から後から起つて來る。それを適當に判別して行くのがなか〳〵厄介であります。斯ういふ時代に於ては餘程皆がしつかりした覺悟を持ち、又本當に慈悲の心持を持つて、佛様のお心持を我が心持としようといふやうな訓練をしないといけない。これは理窟だけではいけない。訓練することが今の時代に必要なことであります。

だから人間には運の好い惡いがあるから、運の好い者は縱ひ運が好くても心が驕らないやうに訓練しなければならない。自分は運が好くて出世したので、自分の力が偉い譯ではないから、勝手なことをしては相濟まぬと思つて、深く自ら戒しめる。又運の惡い人は決して世の中を怨まない。どうも世の中が複雜になつて斯うなつたのだから、ナニモ世間に咎はない。こゝは忍ばなければならない、斯う思つて、自分を勵まして行くといふやうに、順境に居る者も逆境に居る者も、己れを捨てるといふ

ことでなければ、なか〳〵難かしい所を越えて行くことの出來るものではない。これは非常に大切なことであらうと思ひます。

この場合に於て宗教は無用であるとか、日本は優れた國體だから佛教などの厄介にならぬで宜いと言ふやうな人は、まるで譯のわからない人であります。そんなことでどうして優れた國體を保てるか、成程日本は世界に冠絕した國體であるけれども、その優れた國體を護るのは銘々の務めであります。銘々の心が今言ふやうにしつかりしなければ、この優れた國體は護れはしない。國が大事だと思つたら國を護る人の心を建直さなければならぬ。心を建直すには本當の信仰といふものがなければ、建直せるものではないのであります。日本は偉い國だから宗教は要らぬといふやうな議論はまるで議論になつて居ない。それは國を憂へない人の言ふことであります。この國は優れた國だから安心だといふやうな議論をする人は、殆ど歴史を知らない人だと思ふ。日本は天皇を尊ぶといふことに於ては、誰一人辨へない者はないと吾々は思つて居るが、既に六百數十年前に於て、彼の北條義時が三人の上皇を遠くにお遷し申した時に、誰もこれを諫める者がなかつた。その時誰一人止める者はない、皆默つて見て居た。さうして見ると、義時一人が大逆無道ではない、當時の日本國民が皆大逆無道だ。三人の上皇の遠くにお遷りになるのを奪ひ返さうと企てた者は一人もない。北條を命を捨てゝ諫めた者は一人も居ない。皆知らぬ顔をして見て居た。それはつまり自分さへ安全なら宜いと思つたからでせう。こんなことで日本國が萬國に優れた國だから安心だと何處で言へるか、幸ひにあの時は外國の關係などもあまりなかつたから宜かつたけれども、あゝいふ時に外國が今日のやうに壓迫を加へて來たらどうする。或は日本は亡びるかも知れない。斯ういふことが歴史の上に幾らもある。これは教へが廢れゝばさうなる。ちやうど體が壯健だから安心だといつて不養生すれば、病氣になつて、ひどくなれば死ぬと同じことであります。醫者に『お前は體が壯健だから、この分で行けば八十までも九十までも生きるだらう』と言はれて、大いに喜んで、俺は八十までも生きるから平氣だといふので、毎日一升づゝも酒を飲んで、饅頭を食つて……と

いふやうなことをやつて贅澤をすれば、遂には體を壞して死んでしまふ。その時になつて、醫者は八十まで生きると言つたのにどうしたのだらう……と言つても追付かない。それは醫者が惡い譯ではない。自分が惡いのであります。それと同じことであります。成程日本は優れた國であるけれども、その優れた國を護る爲には、壯健な人が養生しなければならぬと同じやうに、國民各自が教養を積んで、本當に信仰の力に依らなければならぬ。信仰の力があつてこそ國がしつかり立つのであります。その點に於て日蓮上人が日蓮が一人頑張つて居れば國は亡びないと仰しやつた。これはナニモ日蓮上人が自惚れて言ふのではない。信仰の力で、法華經のやうな勝れた信仰を本にして、皆が精神的にしつかり立たなければならぬといふことを言ふのでありますから、これでやりさへすれば國は亡びないのだ。斯ういふことで、日蓮上人は御自分のことを言はれた譯ではない。正しい信仰に依ればその力が如何に偉大であるかといふことを言つて居られるのであります。そこの所をよく辨へないで、日蓮は自惚れて居る、自分一人で背負つて立つて居るやうだといふやうなことを言ふのは、それは全く不心得といふものであります。又日蓮上人の流れを汲む人は、本當に己れを捨てゝ國に盡すといふ精神がなくて、たゞ法華經を日に一度づゝ讀むからといつて、日蓮上人を眞似て、俺は日本を背負つて居るといふので、巡査を相手に喧嘩をするといふやうな人は又怪しからぬ人でありまして、そんなことで國を護れるものではない。各々正しい信仰の上に立つて、さうしう自分を捨てるといふことをしつかりとこの際に於て考へなければならぬのであります。

國の危急に迫つた時に本當に國の爲に力を盡した人の事蹟に就て見れば、皆しつかりした信仰の上に立つて居る。法華經の信仰といふやうなことに就て考へても、後醍醐天皇が吉野の行宮に於て御崩御になつた時に、皇太子、後の後村上天皇をお呼びになつて御遺言をなさつた。自分はこの吉野に於て死ぬけれども、心は京都の事を思つて居る。必ずお前達は協力して昔のやうにするやうに骨折つて呉れ、この事に努力しなければ、子でも子とも思はないよ、斯う言つて懇ろに戒しめられて、さうして左の手に法華經の第五の卷を、右の手に寶劍を持たれて御崩御になつて居る。この事は非常に意味が深い。これを江戸時代の學者が、佛教嫌ひが多かつたものであるから、左の手に法華經の第五の卷を持たれたといふことを消してしまつて、『劍ヲ按ジテ崩ズ』としてしまつた。頼山陽の日本外史を見ても、藤田東湖の弘道館記述義を見ても、又大日本史を見ても、皆『劍ヲ按ジテ崩ズ』となつて居るが、本當は左の手に法華經の第五の卷を持たれて居つたのである。然らば何故後醍醐天皇が法華經の第五の卷をお持ちになつたか、そこを考へなければならぬ。法華經第五の卷の中心を成すものは勸持品であります。勸持品は何を說いて居るかと言へば、この法華經といふやうな尊い教を世の中に弘める爲には、凡ゆる迫害に屈してはならないぞといふことが說いてある。或は嗤ふ者があるだらう、罵る者があるだらう、石を投げる者があるだらう、杖を以て打つ者があるだらう、刀を以て斬り掛ける者があるだらう、或は島流しにされるだらう。さういふ時に少しも屈しないで、正しい教を守つて行けば、遂には正しい教の弘まる時が來るのだといふことが勸持品に書いてある。これを日蓮上人は御一生の間御實行になつたのでありますが、後醍醐天皇もこれを思召した。このお經にある通りだ、正しい道を守る爲には有ゆる艱難を冒して、どんな迫害にも屈しないで居れば、正しいものは最後の勝利を得る、この通りだといふので、左の手に法華經をお持ちになつた。併し今足利が横暴をして居るから、これを討つのには、たゞ教へだけではいけない、武力を以てしなければならぬといふので、右の手に劍を持ち、左の手に法華經を持たれて御崩御になられた。これはその時の國民に對する活きた御教訓であります。この法華經をお信じになつた後醍醐天皇の御精神といふものはまるでふいにはならない、さういふやうにしてやはり天皇が深い御信仰があらせられたから、御最後に於て斯ういふ御事蹟をお遺しになつたものと考へなければならぬ。

又後醍醐天皇をお輔け申上げた楠正成は河内の武士であつて、これは非常に熱心な法華經の信者でありまして、自分の菩提寺に法華經を自分で寫したものを奉納して國家の前途の安かなことを祈つて居る。その奉納した法華經は不幸にして今消失してありませぬが、その法華經を

奉納するに就て願文といつて、その趣意を書いたものがあります。これは今兵庫の湊川神社に寶物として保存されて居ります。私も拜見したことがありますが、本當のお經があつたら尙ほ有難いのだが、併しあれだけ見てもわかる。法華經を奉納するに就ては、佛樣が力を貸して下さつてこの皆の信仰の力に依つてこの國が再び昔の正しい國になることを信ずる。又それを念願する、斯ういふことが書いてある。あれを見ますと、正成といふ人は如何に堅固な法華經の信仰の人であつたかといふことがわかる。それから越前の福井の側の藤島神社は新田義貞を祀てある社であります。あの神社の寶物で一番大事にして居るのは、義貞が討死するまで冠つて居つた兜で、これは確かなものであります。その兜の八幡座（正面の額に當る後ろの所）に壽量品の『如來秘密神通之力』といふ八字が彫つてある。やはり義貞も兜の八幡座に法華經の言葉を彫んで戰をしたくらゐでありますから、法華經の堅固な信者であつたといふことがわかる。今ではあれくらゐな事がわからない人はないでせうが、私が今より十年ぐらゐ前に、藤島神社に詣つて寶物を拜見した時に、神主が「此處に『來るが如し』何とか書いてありますが、これはどういふ譯でせう」と言つて聽いたのには驚いた。さういふやうにまるで佛教の顧みられない時代もあつた。そんなやうな昔語りもありますが、兎にも角にも今の吉野朝の事蹟を考へても、天皇を初めとして、本當にあの勤王の事に盡した人々は皆堅固な信仰を持つて居たといふことは確かであります。

いろ〳〵申上げれば、例は澤山ありますが、これ等の活きた事實に依つて見ても、私共は斯ういふ國家多事の際に於て、しつかりした信仰を自分で持つと共に、又他の人にもしつかりした信仰を持たせるやうに勵まして行くことが極めて大切だと思はれるのであります。而してそれはいきなり大衆に呼掛けるよりも先づ以て銘々の家の内からやらなければならぬと思ふ。さうして近くから遠くへ及ぼすことでなければいけない。施しをするナンといふのでも、世間の人の爲には金を出すが、家の事はかまはないといふ人が隨分あるが、それは間違つて居る。それはお經の中に戒しめてある。自分の親が生活に困つて居るのに他の人に惠みを掛けるとか、自分の妻子が飢えに泣いて居るのに、他の人に物を施すといふものは正しき施しではない、名譽心から出るのだと言つて居る。これは確にさうであります。あの人は偉い人だ、慈善事業をやつて居ると世間の人から褒められたいからやるので、本當に人を愛し、人を憐れむといふ心持があつたら、眼の前に困つて居る妻子を捨てゝ置いて、お隣りの人を助けるナンといふことの出來るものではない。自分の親に孝行しないで、隣りの親に親切が盡せるものではない。それを強いてやるのは、要するにあの人は親切な人だ、あの人は世の中の爲に盡すと言はれたいといふ名譽心に騙られてやるので、誠心からではない。斯ういふ者は正しい者だとは認めないといふことをお釋迦樣はちやんと言つて居らつしやる。これは人情を深く究めれば正しくその通りであります。先づ以て近くより遠きに及ぼすといふ考へでなければいけない。無論吾々は世の爲め、國の爲に盡すのでありますが、先づ以て自分の家の内から齊へて行つて、さうしてこれが自ら世の中の爲に及ぶのである、そのつもりでなければ本當には行かない。そこを先づ目標として、無論世の中の爲といふ趣意を以て自分の一家族を勵まさなければならぬのでありますが、その勵ますのには最も近い所から始める、斯ういふ心持でなければならぬ。これは私共自分で省みてもさうであります。私共は家の家族の女房や子供に物を教へてもなか〳〵效き目のある筈がない。何故なら自分が實行出來ない、洵に凡夫でありますから、間違ひだらけであります。間違ひだらけの私が子供や女房に向つて、人間として斯ういふことをやれと言つても聽きはしない、私自身から間違ひをして居るから聽きはしませぬ。今戰地に行つて居る私の倅が一昨年學校を卒業して或る所に奉職をして、辭令を貰つて來たから、私の氣の附いたことをいろ〳〵話して『しつかりやれ、自分の力量を認められようナンて、そんなことはどつちでも宜いが、正直にやれ、自分に委されたことを命に懸けてやれ、人を欺いてはいけない』と言ふと、倅も『そのつもりでやりませう』と言つて居つた。翌日は日曜でありましたから、倅も勤めに出ないで家に居た。私は書かなければならぬものがあつたから　朝薄暗い内から起きて一生懸命書いて居た。さうすると朝八時頃にお客が來て、倅が出て名刺を取次

いで『斯ういふ人が來ましたが何と言ひませう』と言ふ。私は忙しくて堪まらない、どうしても正午頃までに書き上げなければならぬ。どうも仕樣がないから『留守だと言つて返して呉れ』と言つた。それで濟んだが、昨日は嘘を吐くなと言つて居つた親父が今日は嘘を吐いてしまつた、伴も親父はいゝ加減なものだと思つたらうと思ふ。これでは伴に言つたことは何の效き目もない譯で、ちよつと後で弱つたやうなこともありましたが、さういふやうな譯で、親父が自分から戒しめを破るのであるから、子供が肯く譯がない。そこで親父はどうも凡夫で間違ひだらけだから信仰を勵むのだ、佛の教を修行して少しでも過ちのないやうにするのだ、お前も親父と一緒に信仰して間違ひのないやうにしなければならぬではないか。それであるから家中が手を携へて佛に縋らう……斯うなつて來ると子供でも納得するのです。さういふやうな譯でありまして、どうもこれは宗教の信仰といふ所まで行きませぬと、自分が聖人、賢人なら宜しいが、私共のやうな凡夫でありますと、なか〳〵若い者を導くことは難かしい。學校でも私は學生に始終言ふ。間違ひだらけだ、併し間違つて宜いとは思つて居ない、直さうと思つて居る。一緒に努力しようではないかと言ふのでありますが、どうもそれでないと、私共は人を引張つて行くことは難かしい。自分の信仰はもうこれで澤山だと思つていゝ加減にして居つては、なか〳〵世の中を導くどころではない、自分の小さい家一つを齊へて行くことは出來ない。斯ういふやうな譯でありますから、だん〳〵世の中が複雜になると、先づ信仰の力を痛切に感じます。

この秋に當つて、命を懸けて法華經をお弘めになつた日蓮上人のお會式を營んで、皆がお互に玆に集まつて、信仰を語り合ふといふことは、小さい事のやうですけれども、これが何等か吾々の心に力を與へ、その力が培はれて、やがて世の中の爲にも相當に役に立つ働きが出來るだらうと思ひます。私は斯ういふ時代に生れて自分一身の安逸を貪らうとは露ほども思ひませぬけれども、併しながら世の中が複雜であれば、隨分運の好い惡いがあつて、人の心に不平が多いといふことを否定することは出來ないのでありますから、どうかお互にさういふ心持になつて、少しでも幸福になつた時に自惚れないやうに、少しでも不公平な事があつた時に腹を立てないやうに、佛樣の大慈悲を身に體して、今直ぐには私共は完全な行ひは出來ないのでありますが、出來るだけ努力して、斯ういふ時局に於て命懸けで教を弘めた日蓮上人をお手本として、日蓮上人を通して法華經の信仰を勵んで行くといふことであつたならば、先づ〳〵吾々のやうなものでもさう大して過ちがなくて、幾らかでもこの場合に國家に貢獻して行くことが出來るだらうといふことを確く信じて居るのであります。

たゞ私の平素感じて居る所を有體に申上げて、皆樣の御參考に供する次第であります。（完）

生還不期

寺澤美世

一

月を明りの塹壕で　ひぢを枕にまどろめば
瞼に浮ぶ故郷の　老ひし一人の母のかほ

二

銃聲とだへし靜寂に　北空きらめく明星や
露にしめれる軍裝も　熱き血しほに何のその

三

晴のお召のその時に　二度と歸らぬ父母の家
光榮輝く不肖の身　鳴いてくれるな草の蟲

四

死してぞ生くる武夫が　又の遇ふ日は九段坂
櫻かほれる華の下　永久に護らん皇くに

本佛實在の宗教哲學（七）

河合陟明

六

佛教の實在論は、これを基礎論に於ていへば眞如論であり、これを建設論に於ていへば本佛論である。これを佛教の目的たる一佛身概念としていへば、前者は法身理常であり、後者は報應事常といふ關係となるのである。眞如より如何にして本佛に達するかといふことが佛教の問題であり、且つその全部であり、又廣く一般に凡ての宗教や哲學の課題であり、道德も亦その根柢と完成をこゝに置かねばならぬのである。歷史の意義・存在の理念・生の目的はこゝに顯れて來るのである。その達すべき道はおのづから二面に現れる。それは知と行である。一は如何にして眞如の認識より本佛の認識に達することができるかといふ問題であり、一は又如何にして法性の實踐より本尊の體現に至ることができるかといふ課題である。一言にしていへば我々は如何にして本佛を知ることができるかといふ問題である。しかもかく二面に於て現れるといふことは、實在の本質に根據するのである、即ち凡ての存在の無作本有なる構造と性格より由來するのである。この大いなる問題を解決せんがために、予は如上に於て、抑も實在といふものを根本的に考察すべく、まづその形式的規定より始めて、第一に時間の概念より見て、存在における時間性と超時間性との角度より、實在とその自己認識即ち自覺の問題を若干展開した。更に空間概念よりし、又更に內容的規定として質量概念 Massenbegriff 或は所有概念 Possessionsbegriff 或は又屬性概念 Attributsbegriff 等より考察せねばならぬのである。今予はしばらく空間的規定を後にして、質量概念より再び更たに、實在と認識及び實踐の問題を考へてみたいと思ふ。

先に、予の根本的立場たる本有體系を論じて、まづそれが佛教における基礎的實在概念たる眞如法性の多面的意味、特にその二面對立的なる諸範疇を包攝するところの、最も包括的なる體系 comprehensive System なることを明かにした。しかもそれは凡て本有と今有といふ對立的一双の概念——主として時間的範疇に屬すると見るべき一系列——に於てこれを論じたのである。しかし今は一段と思惟を精緻にし論理を嚴密にして、今有を待たず、たゞ本有そのものの意味の中に、實在の根本原理を發見することができる所以を明かにしたいと思ふのである。即ち實在とその認識及び實踐としての自覺の根據を、純粹に本有概念そのものの內に把握せんことを begreifen 求めるのである。今有といふときは既に無明といふ迷妄の原理が加はり來つて、これを媒介として、本有の實在が現實界に下つたことを意味する。固よりいふまでもなく、問題は常に現實界にある、現象界にある、經驗界にある、歷史の世界・時間の世界・我々の直接する生そのものにあるのであることは勿論である。今有の現實を離れて人生はなく、凡ての學 Wissenschaft の問題もない。今有の現實が常に一切の問題の提供者であり、且つ解決者でもあらねばならぬ。しかし今有の根柢には常に本有がある　本體がある　根本實在がある。本有を離れた今有もなく、今有を離れた本有もない。しかも凡て今有の根本即ちその一切の根據や根柢は、本有そのものの中にこれを求め來らねばならぬのであつて、たゞ果して如何なる思想の圓融性を以て、これを成し遂げ得るや否やが——眞如實在より本佛實在への認識と實踐に達し得るや、絕對そのものの自覺と信仰に達し得るやといふことが——苦心と努力と問題の存する處であるのである。

而して先にも語つた如く、實在の根柢性を佛陀的概念に於ていへば、それは法身であり、本有體系に於ても、特に時間的考察よりする實在根源論としては、この法身としての基礎的意味を以て、一群の諸概念を包攝することを示し、又特にそれが因果兩面に通ずるものであることをも說いたところである。天台教學の基礎的立脚地も勿論この法身眞如の理境にあつた。予も亦まづこの法身の意味をなほ一たび概觀し、それが本有概念に於ていかやうに Struktur-analyse 構造分析せられるか、即ち予の所謂無作三段體系に於て、第一の先驗的なる法性無作なるものの內面的構造は如何なるものであるかを考察してゆきたいと思ふ。且しかもそれを特に佛教教理史上　新たに本有といふ實在的範疇から再構成 Rekonstruktion してみようと思ふのである。

元來この本有といふ一絕對の理的本體　即ち萬有諸法の當體　或は寧ろその內在的普遍の本質を、理體といひ法體

といひ又法性と呼び法身と名くるのであつて　法身とは理法の積聚の意味であり、即ち法界の本性を意味し、從つて それは實在の原理的體系として　知識の立場より見るならば　總ての眞理と認識の根源たる原始領域　或は純粹論理的對象界ともいふべく、即ち無作本有なる實在は先驗原理として、人格以前の根柢たる非人格的内容に留まり、所謂有佛無佛性相常然・遍二一切處一而無二有異一　超時空的なるものであり　非因非果にして超因果的なるものであり、しかも亦因亦果として因果に通じ　能く因果を成すものであり、即ち不動而至るものであり、不二論一相應與不相續一、境智冥合・主客未分にして超個體的なるものであり、亦無二有量及無量一　固より有限の量に非ず、亦何等の量も無き零量・無限小量に非ず、將又必ずしも無限の量・無限大の量といふにも非ず。所謂量或は質量概念をも超越したものであり、從つて非常非無常なるものであり、即ち先にもいふ如く　特に時間的概念より見るときは　その時間的連續の範疇を超越して非常であり、亦勿論時間的有限にも非ず　一切の時間的制約を脱して非無常なるものであり、又その本質に於ては非色質非心智にして、陰界入の攝持する所に非ず、　即ちこれを否定的・超越的にいへば双非理極即法身として　一切の概念的規定及び範疇を超越したものであるから　これを非身の身・無壽の壽・不量の量といふべく、長短古新・大小遠近を絶して無延無促なるものであるが、しかも亦能く伸縮自在なるものであり、從つてもし又これを肯定的に表現すれば、法性を師軌とし還つてまた法性を以て身となし、法界を指して虚空量に同ずる如虚空常・湛然たる妙常なるものであり、即ちそれは造作を用ゐて存する有作に非ず。無作無漏のものにして堅固不壞金剛の妙體たり、有爲轉變の境界に非ずして。無爲常住の境地たり。因緣を待つて生ずる所謂因緣生に非ず又中間生に非ず、無動無出・不生不滅・不遷不變　一切の假相を去つて眞にこれ實相なるものである。

而して是の如きものが生自體として吾々の存在の根柢をなしてゐるのであつて、こゝに吾々の人格的個體生命の根柢は堅固不動なるものであることを知り得るのである。即ち是法身者　是眞實有　無二依處一故　是自本故　猶如二虚空一　是故說二常一。從つてこれは實在の眞性として　カントの所謂物自體 Ding an sich にも當るものであるが。しかし先にもいつた如くかゝる存在自體即ち有自體は　實に深く心自體であり、更に尅實していへば覺自體としての根本構造を有するものであり、即ち實在の先驗的・理的・本體は　一心眞如であり　如來藏中實理心であり　一心の圓覺なるものである。この一心は凡聖迷悟一切の本であり　一切の諸法は皆この心によつて成立するのである。即ちこの一心は法界を圓裏して餘りあり　太虚に擴つて外なく、横に該ね竪に遍きものである。故にこれを體大と稱し、又この一心の覺性即ち佛性は　これ即ち一切の方軌であつて、一切の佛法を含藏するものであり、一度び佛性の悉有を聞かば便ち能く正解を生ずるに至る、故に無相の眞心を以て有相の方軌となして　これを相大と稱し、又この一心の妙用は周遍して現ぜざる所がない。故にこれを用大と稱し、この體相用の三大　圓かに一心に備はるを指して大方廣と稱するのであり、この一心即ち吾々の生の内面たる己心を以て　直ちに因果修證の本となすのである。

故に宇宙の本性に就ては法性と云ひ、衆生の本質に就ては佛性と呼び。佛身の本體に就ては法身と名ける。所謂法界の法性は本來至寂不動にして起滅動搖なく、如來の法身は湛然たる妙色常住にして無常遷流を離れ、將又群生の佛性は無量の相好莊嚴・威德炤明なるものであり、かくて實在の本體は法爾自然に是の如き無量の德性を具有してゐるのである。しかもそれは猶ほ未だ非人格的原質たるに留まるのであるが。それが全く果上における佛身の基礎をなすものであり、後に發展開出して偉大且つ超越的なる人格的佛陀の可能的成立根據をなすものなのであるから、佛性及び法身といふ如き、既に人格的意味を稍强く宿してゐるのである。性は因に屬し佛は果に名く。佛性は理的本體にせよ事的修行にせよ、純粹に因位的名稱であるが、法身は因位にも果位にも理極にも事極にも通ずる。故に特に二面の現定が同時に成立つ。相者謂始修起二一切善法一。言二無相一者謂一切法皆不可得。從つて先にいはゆる體本用迹論における法身の體も、實はこの因中と果上との理事兩面を具備してゐるのである。菩薩無限の實踐的向上。即ち佛性開發の善の累積による　修因報得の佛陀の報身としての菩提の妙果。換言すれば經驗完成として法の完全なる人格化的積聚の身は、無作本有の無爲の理法身とその實體に於ては何等の異りもない。而して眞如法身は根本實在ではあるが、更に深い意味に於て眞に最高の實在といふべきものは、かゝる一切の眞理の根源としての　即ち認識と對象の原始的先驗統一としての法身の本體が、その無明と共存する辯證法的構造の下に。斷えずその所與の無明を破りゆかんとする隨緣順理法性的展開をなして、不覺より自覺に進む向覺意志となり、こゝに永遠なる眞理の直觀として　眞智の内容・人格的内容として　吾々の個體的存在の内に人格化され來り、かくて一人格の自覺的自由なる行爲的主體の中における法性の自發自展が　即ち吾々の人格的創造の事實となり、而してかゝる自覺的・積善的なる自己即法性的發展の究極に於て　遂に本體の絶對を智性の中に鎔融同化したる認識論的絶對となつて、こゝに即ち絶對の開覺成道を完了し、

據つて以て人格としての完全實在を成就したる佛陀そのもの　即ち報身にある。亦應身にあるのである。今その法身より報應身に至る即ち佛性より佛陀に至る關係に就て、一面には形式的なる時間の範疇より見、他面には內容的なる質量概念より見、それらの本有體系における Deduktion 演繹或は Ableitung 導來を見て、進んでその綜合的考察を概說してみようと思ふ。而してそれは廣く佛教一般に通ずる基礎的思想に對する一種の現代的把握であつて、それによつて佛教哲學の問題を一層明かにすることができると思ふのである。

抑も、本有今無、本無今有、三世有レ法、無レ有二是處一といふ大涅槃經の命題は、世親も既に着目してこの解釋をなしたるが如く、これ實に佛教一貫の根本原則であり、最も廣汎にして包括的なる諸法の法性・萬有の眞理であり、從つて一切の具體的論理及び倫理的・自然的因果律等に對する純理的根本形式として、實在の最も普遍的なる法則性である。一切の今有は本有にして、本有は必ず今有ならざるはない。無作の本有・有作の今有・無作即有作の本有而今有ならざるはない。無作者、無二思無レ念、無二誰造作一、故名二無作一、凡ての存在は本有無作として其自らに於て有り、自己自身に依つて立つ超時間的なるものである。

然るに抑も、「有る」とはいかなることであるか、それは何を意味するものであるか。一切の有るもの即ち一切の今有なるものは、一物と雖も必ず本有のものであること、本來有るところのものであることは既に見た。而してそこに於て、遂に無始といふ概念より尙ほ一歩を進めて無作なる概念に達したのである。然るにかく無作にして本來有るといふことは　自己自身によつて有り、他者によつて有るのではなく、又他者といふものもない。一切は唯全く本有であり、本有なるが故に一切が融即してゐる、圓融相即してゐる、即ち本有として實在性を有ち、融即として普遍性を有つてゐる。實在も普遍も、時間的も空間的も、たゞ縱の次元に立てると橫の次元に並べるとの　置き方の相違のみであり、所謂X軸とY軸との坐標軸の相違のみであつて、二者一に融すべきものである、二者互に各々他を含んで以て眞に實在の活動形式をなすものなのである。故に時間に於て空間を見、空間に於て時間を見るべきものである。而して他者なくして唯だ本來有る、所謂

至理寂滅　無レ生無二生者一　無レ起無二起者一、理本無生　亦無二宰主一（止一ノ二）自體無二能生性一　無二他之能生者一
自體無二所起性一　無二他之所起者一　是亡レ實　彰二假立二生起一（慧澄、講義一）能生謂レ生　所生謂レ起（玄）

かくして有るといふことの存在の論理を開展したならば、本來有るといふことは、自ら有るといふことであり、自ら有るとは、自らを「有らしめる」といふことである、ものが自らを方しくそのものとして有らしめることである。一切何等の他者なくして、他者によつて動かされずして、ものが自己自身を正に爾か有らしめること、有らしめてゐることでなければならぬ。此に於て本來有るとはまづ本來有らしめること、或は自ら有らしめることであることとなつた。然るに更に進んで、既にかく有らしめるといふならば、こゝに「有らしめられる」ものがなければならず、從つて有るとは有らしめるものが有らしめられるものを有らしめるといふことである。或は簡單にいへば、有るとは有らしめられて有るといふことである。然るに一切が本來であり自己自らであつて他者といふものがないのであるから、有らしめるも有らしめられるも、凡て自己自身の外にはない、自己自身の範圍を出でない、自己本來の圈內を出でたる何物もない。それならば、有らしめるも有らしめられるも、凡て自己自身の內における內面的分裂であり、或は內面的對立である。もの其自身・存在自身が原始分裂することである、してゐることである。かの生物學上の細胞も亦自らいはゆる細胞分裂をなすのであり、それも單細胞として一なるものが自己の內面から二個に分裂するのである——（外面から分裂するといふのでは自己分裂ではない、それは始から二者が存在してゐたのである、從つて外面的分裂といふことはあり得ないこととなる。）——しかし細胞では初めは一個のものが後には二個となるのである。實質的に從つて空間的にも全く分裂して、結果に於ては物質的に二個となるのである、原形質 protoplasm が二つに分れて離れて獨立するのである。然るに之に反して、今、純粹論理 reine Logik として、存在の意味を反省してゐる立場に於ては、飽くまでも、有らしめると有らしめられるとは、一の有るといふ實在概念の統一體の中に於て、かく分裂し對立してゐるのである。飽くまでも二者の根柢には一の共通の統一的なる不變的なる或物があるのである。即ち一の內における二であるのである。物質的なる細胞の如く全く分離して存在するのではない。どこまでも二面は一の體系を構成してゐるのである。しかも細胞分裂は時間的現象であり經驗界の現象であり、それには時間といふものを必須の條件として要するが、今こゝに展開する存在論は、全く純論理的なる領域に屬し、即ち超時間的なる又從つて超空間的なる先驗界における眞理の發展として、一個の存在概念の超時空的なる論理的開展であるのである。從つて即ち有らしめると有らしめられるとは、先驗的なる原始對立であつて、しかもその實體或は本質はいはゆる至理寂滅の

まゝ、不變に一體系をなしてゐるのである。即ち存在論的にはいはゆる本有不改に、又從つて認識論的にも覺了不改として、どこまでも一本有をなしてゐるのである。

かくして有るといふことの意味が、有らしめると有らしめられるとの先驗的對立であるとするならば、その有らしめるとは、その存在の總ての內容・總ての性質・總ての作用をして、即ち總ての有らしめられるものをして、まさしく總て爾か有らしめるところのものであらねばならぬ。總てをして爾か有らしめてゐるはたらきでなければならぬ。然らばその有らしめるとは、此に於て、「有つ」といふ意味とならねばならぬ。總てをして爾か有らしめる、あらゆるものをして正に爾か有らしめるといふことは、總てを有つといふこと、あらゆるものを正に自己の內容として有つといふこととならねばならぬ。之に對して有らしめられるとは有たれるといふこととなる。此に於て、有るとは有らしめるであり、有らしめるとは有らしめられるを要し、有らしめられるとは有らしめるものが有らしめられるものを爾か有らしめること、即ち有つこととなるのであつて、一言にしていへば、有るとは有つことである。從つて當然それは、有つと有たれるといふ二面がなければならぬ、かく有つと有たれるといふことが有らしめると有らしめられるとの關係である。今一たび論述すれば、この關係は、有らしめるものが有らしめられるものを爾か有らしむべく有つことであり、その有つといふことによつて有らしめると有らしめられるとの二面が、飽くまでも一體不離の一體系をなし、一如體系をなし、一本有體系をなすことができるのである。かくして本來有るとは本來有つといふこととなつた。

然らば有つとは何であるか。有つとは自らは純粹に無內容にして、しかも總ての內容を有つことでなければならぬ。有つものは自らは全く空しくして しかもその相手のもの、自己の有つところのもの、自己によつて有たれてゐるところのもの、即ち自己の內容とするところのものによつて、自らは全く空しきところのその自己自らを無限に富ましてゆくことでなければならぬ。

存在即ち有とは今有のことであり、今有は必ず本有である 即ち實在のものである。而して本有とは本來有るであり、本來有るとは本來有つことであり、此に於て、本有とは「本有する」といふ動詞的意味をなすこととなつた。本來有るといふときは「本有である」といふべきであるが、本來有つといふときは本有するといふ方が一層妥當である、即ち有つといふ意味に一層ふさわしいといへる。實在即ち本有とは 本來有つものと有たれるものとの根本的對立にして且つ合一せるものである。

而して今は純粹に超時間的・先驗界における眞理體系として、本有概念の演繹を試みてゐるのであるが、この立場に於て有つこととと有たれることとは何を意味するものであらうか。自らは全く空しく、即ち自己自身は徹底的に空である自己によつて始めてこの總ての內容が生かされ、即ち存在に齎され、存在せしめられ、存在の權利を荷ふことを許され、否その內容そのものは本來の存在であるとしても 方しくそれを有つものがこの內容を有つことによつてその存在の意味を發揮するに至らしめられ、而も又他方、かの自らは全く空なるところのものが、その所有するところの內容によつて、限りなく富めるものとなつてゆくといふことは抑も何であらうか。有つもの自らは空なるが故に、有たれるものに何等の內容をも加ふるところなく、もし加ふるところがありとせば、それは自ら全く空しきものとはいふことができない。是くの如く何物をも加ふるところなくして、即ち自らは空しくして、しかもこの空しき有つものがなくしては又有たれるものがない、有たれるものも亦存在を維持することができない。有たれるものも亦全く空しくならねばならぬ。空しく終り空しく死せねばならぬ。空しき能有者が一切の所有物を活かし生命あらしめて、それによつて又無限に貧なる空しき自己が無限に富んでゆくとは何であるか。或は總ての豐かなる內容が、唯だ一の空しき或物・空なる持手・空の能有者によつて、しかもこの能有者によつてのみ、この one and only one によつてのみその豐かなる內容的存在の意味と價値とを發揮するに至る、至らしめられるとは何であるか。

有つものとは本體であり實體であり、有たれるものとは性質であり本質である。一は如是體であり一は如是性である。如是體なくして如是性なく、又如是性なくして如是體もない。體と性とは全く一如不二であり、不離不可分である。有つと有たれるとは、此に於てまづ如是體と如是性との關係であることを見なければならぬ。しかし更に進んで考へてみよう。如是體即ち有つものによつて如是性即ち有たれるものが、限りなくその意義と價値とを、即ち又その能力と光明とを發揮してゆく充實してゆく その働きを增大してゆくといふことは、たゞ如是體として有つといふことのみによつて可能なことであらうか。又この體がその所有する屬性によつて無限に富めるものとなりゆくといふ

ことの眞の意味充實は、たゞ單に靜的なる又自然的なる本然的なる本來實體としての本體としての有つといふことのみによつて滿たされるであらうか果たされるであらうか、可能なことであらうか。　否そこには尙ほ今一つ何物かが何等かの意味が加らねばならぬのではないであらうか。單に客觀的に有つと有たれる卽ち實體と屬性といふのみならば、それは機械的・物質的なものに於てもあり得、從つて又盲目的なものでもあり得る。　しかしかゝるものに於ては眞に內面的なる意味をなし得ない。體によつて性が活かされ、又性によつて體が活かされ、兩者共にその富と力と生命を交互に賦與し又獲得するといふ働きをなし得ない。實體と屬性とは單に偶然的なる結合でもあり得るのである。　之に反し眞に內面的必然の關係に於て有つと有たれる卽ち體と性とが、全く一體系を成し合ふものは果して何であらうか。

否更に根本的な事實がある。　體と性とが單に存在的な結合をするものに於ては、かゝる物は猶ほ單に客觀的なものであつて、從つて思惟の內容となるものであり、未だ眞に總てのものを自己の內に有つといふことはいはれない、猶ほそれは有たれるものであつて眞に有つものでない、猶ほ何等かの他者によつて包まれるもの　包まれ得るものである。眞に本有といふ意味を全うせず活かして來ない。　卽ち　一切が本有の存在であり且つその一切を本有する、しかもそれを內面的活ける意味に於て本有する　といふことにはならない。眞に有るもの眞に有つものは、思惟　Denken を超越 transcend したもの、或は思惟の內容を超越したものでなければならぬ。しかし全く思惟を超越したものはこれを考へることもできない。　故に、眞に有るものとは思惟の外にあつて、否寧ろ思惟を包んでこれを成立たしめるものでなければならぬ　思惟によつて盡すこと能はずしてしかも思惟を成立たしめるもの、　無限の思惟を生み無限の思惟を包んでしかも無限の思惟を超越したもの　無限の限定を超え無限の働きを超え無限の性質・無限の內容を超えたものでなければならぬ。　何等の意味に於ても、何物によつても、自己自身が他によつて打ち超えられない、包まれない、犯されない、斷ち切られない、破られない、從つて無限に連續的であり、否連續的といふ意味をすら超えたもの、自己の背後には何物も立ち得ざるもの dahinter stehen し得ざるもの、自己を見るものなきもの、何等かの他者によつて自己が見られてゐるといふことのないもの、從つて眞に自己自身によつて立ち、自己自身に於てあり、自己自身を見　自己自身よりして無限に創造的に働くところのもの、從つてその一切の働きに對して自己自身が責任を有つもの　道德的なるもの、自己の全體が部分に現れるもの、部分が全體としての意味を有つもの、その働きは外界によつてゞなく、外界といふものもなく　他律的にでなく、固より盲目的ではなく、內面的必然よりして自ら働くところのもの、しかも自己自身は空しくして、從つてその働くといふは　自己の有てる無限の性質を働かしてゆくもの生んでゆくもの、無限に働き無限に生みつゝ　しかも自己自身は常に空しく、しかしその生みゆく內容を　卽ち一切の性質一切の働きを　自己の內に包み、自己の內に有らしめ、それによつて無限に自己は富んでゆく豐かとなつてゆく、その包まれるもの有たれるもの有らしめられるものを活かすと共に、自らも亦それによつて活かされてゆく、かくして二者共に限りなく活きてゆくものとは、果して何であるか。是くの如く一切のものを生みつゝ有つ、否有ちつゝ生む、しかも活ける內面的意味と力とを以て且有ち且生むといふ如きものは、果して何であるか。かゝる意味に於て一切の性質の實體・一切の作用の本體・如是性の又如是力・如是作の如是體たるところのものとは、果して何であるか。全存在の內面的必然の唯一の本有者、一切の存在に對して生命を賦與し、自己も亦その一切の存在によつて根本的に活くるところの唯一の本有者、本有するもの、本有であるもの、本來有ち、本來有るものとは、果して何であるか。

それは知るといふことである、心といふものである。意識といふものである、我れといふものである　精神作用といふものである、自覺といふものである、一切のものを內面から照す　內面的に照す、自己の內面に照すところのものである。眞に純粹なる相・如實なる形又充實せる意味に於て　有つといふことは知るといふことであるのである。知る心或は心が知るといふことによつて　始めて一切が內面的に活きて來るのである。而してそこに始めて人格といふものが成立つのである、人格といふことの意味が成立するのである。

此に於て、有るとは有らしめるであり、有らしめるとは有つであり、有つとは知るであり、實體・本體・如是體とは心であり、卽ち本有とは人格であるといふこととなつた。それは吾々の個々人格の原型 Urbild 又は先驗的範型 Vorbild, Muskerbild, Persönlichkeit überhaupt 超個人的人格性・人格一般ともいふべきものである。

此に於て、眞の實在は、知るといふものであり　自覺的なるものであり、人格的なるものであることを知るに至つたのである。眞の Sein 有とは Bewusstsein 意識であり、Selbst-bewusstsein 自覺であり、プラトー及びアリストテレス以來の das Seiende als solches 存在自體・有自體とは心であり、Wissen 知であり、その知の根本的相として Gewissen 良心卽ち佛性であり、知の積聚體であり智の統一體系であり、かくして眞の實在概念 Realitätsbegri-

"とは原理的意味における即ち先驗的・超個性的なる意味における人格概念 Persönlichkeits-begriff であることを知るに至つたのである。本有とは實に一心に外ならない、無作本有の根本實在とは眞に法界的一心であるのである。これを一心の心性といひ、一心法性といひ、一心眞如といひ、一心の大我といひ　一心法界といひ、又實に一大佛性と稱するのである。これ即ち又、佛陀の根本的本體たり基礎的地盤たる法身に外ならないのである。

かくして一大本有の有つと有たれるとの二面は。無作に即ち先驗的・超時間的に對立し且合一してゐるが。それが經驗的現實界に下り來つて今有となるとき、特に前者即ち有つもの即ち知るものが超時空的となり不動不變者であり、之に對して後者即ち有たれるものは時空的となり不斷の變化者となる。否二者共に本有　故に二者共に不動　又二面共に今有　故に二共に動　故に又二面共に亦動亦不動・非動非不動なるものであるが、且くかく超時間面と時間面とを分つことができる。しかし今は純粹なる先驗的・超時間的なる純粹論理の世界に於て　飽くまでも本有體系における眞理の展開を論ずるのであつて、こゝに於て一の本有における本能有者とはこれ即ち心であり人であり知であり覺であり。これに對する本所有物とは即ちこれ物であり法であり有であり行であるのである。予は前者を本有の覺性となし、後者を本有の覺藏と稱する。或は一の心性・一佛性概念によつてこれを表すならば、前者たる能は即ち心であり佛であり・後者たる所は即ち性であり——但し何れも原理論たることはいふまでもなく——能所合して心性となり佛性となる。本有といふ唯一の有の内に於て、更に知の面と有の面とがあり、或は換言すれば、唯一の知といふものの中に於て　更に又知と有との二つの面があるのであつて、それは能と所の關係をなしてゐるのである。これが實在の最も包括的・普遍的なる先驗論理であり、これが即ち眞如の根本構造であり、法性の原始體系であり、本然の組織であるのである。更に有つもの即ち知は超越的・超限定的・純粹形式として即ち空であり、有たれるもの即ち有は内在的・被限定的・純粹内容として即ち假であり、而してこの能有の知と所有の有との根本統一として二面を双非し双照する一の本有は即ち中道であつて。こゝに一境三諦を成立たしめる。夫三諦者天然性德である。更に又所有としての有としての萬假そのものがそれ自らに一の空として一の如として能有たる知の空に如し、又能有としての知としての一空そのものが全く萬差し三千として即ち諸法として所有たる有の萬假と現れてゐる。有るといはんか既にこれ照し。照すといはんか既にこれ有り。寂體宛然として照・照體宛然として寂。非有非無中道第一義諦微妙寂照なるものである。

本有の實在は本有に知の面と有の面との二面を有つ即ち本有する。換言すれば、人格の面と眞理の面と、認識の面と對象の面と、佛性の面と法藏の面と、心照の面と物體の面と、知見者たることと行爲者たることとを本有する。而して前者は後者を包み、これを内に見、内に照すものである。即ち一空萬假を攝して即是中道なるものである。實在は根本的に自覺面が實在面を包み、無作の理體は先驗的に知の面が有の面を照し、本有は本來に於て能有人格が所有存在を能有してこれを自己の性質としてゐるもの、主が客に主たるものである。換言すれば實在の統一は本來人格的統一であるのである。

本有における所有物は無限なる眞理群であり意味體系であり一切の形相であり形象である。その一々が力と考へられるならば、これに對して唯一の能有者たる心即ち自覺者・知るもの・人格そのものとは　かゝる一々の力が自己自身を維持する爲に必要なるところのものとして　かゝる無限の力の總ての根本統一として力の主體であり、一切の有の實體であり、或は實體の中心であり、又即ち絶對意志であり、乃至即ち永遠知見者である。この能有者は自覺の形式となるものであり、かの所有物は自覺の内容となるものである。これが實在即自覺的なる自覺の根本構造である。かくして即ち有自體は生自體であり物自體であり心自體であり覺自體であるのであつて、眞如・心如　即ち又法性・心性・覺性・佛性そのものの原型相とは正に是の如きものであることを知らねばならぬ。而して自覺とは實に本有の覺性によつて本有の覺藏を自覺し即ち限定し即ち開發し即ち積聚し　本有を今有化することによつて今有を本有に還し、無作を有作化することに即して有作を無作化する處に現れるのである。こゝに即ち知識の意義が成立つのである。

南無妙法蓮華經

本佛應現の成道會　紀元二千六百一年大東亞降魔戰に臨み　天業經綸の宣戰の詔勅を拜し奉りて感慨極まり無く

立正安國　四海歸妙の大誓願を披瀝して　謹んで　皇都　天恩舍の御寶前に記す。（つゞく）

知恩報恩

守屋貫教

一、覺悟

この頃世界觀といふ詞が用ゐられて居るが、それは私共の間の用語でいへば覺悟といふ事に當るであらう。世界觀といふ詞の如く學問的でないが、覺悟といふのは昔から用ゐられて居る。事の大小を問はず、何事をするにも覺悟が必要である。況して世界に處するに當つて何等かの覺悟がなくてはならぬ筈。歐洲第一次戰爭以後、世界がヒツクリ返る程の大動亂の後、世界觀といふ詞が、特に用ゐられて來たのは當然である。

歐洲のそれとは反對に、吾が日本は今や東亞新秩序の建設中である。今迄の東亞の島國に立て籠つて居つたのとは違つて、今や日本は東亞の眞中に立つて常に新秩序の建設中である。今迄のやうな島國的根性で、どうしてこれ程の大事業が出來ようか。東亞の新秩序を建設せんとならば、それに相應する覺悟卽ち世界觀が必要である。新秩序だけが出來あがつて、吾々國民の覺悟が出來て居ないなどとは考へられない。それで新しい世界觀の一翼として知恩報恩といふことを申して見たいと思ふのである。

二、知恩報恩

近頃世界に於て、政治上の指導原理としてやかましい問題は、全體主義といふ事である。これはそれ〳〵特色はありながら、伊太利がフワツショとして、獨逸がナチスとして何れも全體主義に立つたのでやかましいのである。更に又此全體主義が英米の自由主義に對立し、殊さへ今や兩者相戰ひ、舊來の政治上の指導原理たる自由主義を打倒して世界革新の原理たらんとする點に於て、最もやかましい問題である。

それは歐洲の大勢であるが、吾國に於てもこの世界革新の勢ひに漏れず、全體主義の潮流は將に壓倒的なものがある。況んや先の滿洲事變といふ、日支事變といひ、吾國自體が、舊套を脫して東亞の新秩序を建設せんとする途上にある。獨伊兩國がその全體主義を以て歐洲の新秩序を再建せんとするならば、吾國も亦その所謂皇道主義を以て東亞の新秩序を打建てんとするものである。

皇道主義は獨伊のそれとは必ずしも同じからずとするも、善き意味に於ての全體主義である。皇道主義は今時始めて唱道された政治的指導原理といふが如きものでなく、肇國と共に久遠なる吾が國體に基ける國民の覺悟でもあり世界觀でもある。そこで吾々はその國民の世界觀に內在して居つた處の知恩報恩を摘出し、敢てまた今日唱道せられる處の全體主義世界觀に一掬のうるほひを與へたいと思ふのである。

抑も知恩報恩とは、佛敎世界觀の根本要素であつて、その事を最も明白に確實に說き示せるものは心地觀經である。心地觀經には所謂四恩の事が說かれてある。一には一切衆生の恩、二には父母の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩とある是である。佛法が出世の法として世間に相對する所以は、全く以て知恩報恩の爲めである。所謂恩を棄てゝ無爲に入るは眞實報恩の者なりである。恩を知り恩を報ずる事は、世界の當然の事であるにも係はらず、却つて血緣の故に利害の故に行はれない。之を世界の根本に立ち戻らしめて、ありのまゝの報恩の態度に生かさんとするのが佛敎である。佛敎とはそれを立脚點として出發したものである。從つて知恩報恩とは佛敎世界觀の根本的態度である。

本來報本反始の吾國民性、祖先崇拜をその特色とする吾國民性に、佛敎の知恩報恩の態度が著しい影響を與へた事は、吾々は鎌倉期の平家物語に之を見るのである。彼の重盛が平相國入道を諫止する邊、心地觀經を引用し來つた、その天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩の四恩を說き、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずと慨く處、而も此平家物語がその時代の文化的產物として平家琵琶に依りて津々浦々に宣傳

された事を知るならば、いかに當時の國民の覺悟が、知恩報恩に充されて居つたかを知るに足るのである。

三、偉人は皆報恩者なり

以上知恩報恩が佛教世界觀の根本要素なる事、それが吾國民性の報本反始の信念に影響してそれが國民の覺悟となつて居る事を說いた。吾國民が方今の世界特に東亞の現狀に鑑みて、全體主義的世界觀を打立てんとするならば、國民の信念であり覺悟である此知恩報恩を再認識するのでなければならない。之を忘却して唯徒らに全體主義に走るならば、そは基礎工事のない建築に終るであらう、空中樓閣に墮するであらう。

凡そ世界の經驗を經た人、世の中の醉いも辛いも悉く嘗め盡した人は、世界が天地と人生とをこめて知恩報恩を以て根柢として居ることを知つたであらう。彼等は人生を經終つて後、人生の根柢を爲すものは報恩である、天地の前には跪いて感謝するのみだと知るであらう。然るに未だ世界の經驗を積まざる青年男女は、之を以て退嬰的なもの進歩を妨ぐるものとのみ考へる。然る間に彼等は年老いて知恩報恩の大切な事に氣がついても、その時は既に氣力衰へて勇氣なきを如何せん。吾々の廟ふ所は老人の始めて氣がついた此天地の嚴肅と人生の眞面目を、青年の意氣を以て實踐させたき事である。人間はいつも世界人生の重大事を經驗しながらそれを實踐せずに悔を殘して死んで行く。後から來る人々も同樣に悔ある人生を送つて行く。誠に愚かしきは人間である。

古來人間中の人間といはれた偉人傑士は、東西何處の國の人たるを問はず、知恩報恩の人であつた。彼等は必ずや君に忠であるか、親に孝であるか、一切衆生の眞心を盡した人であるか、或は天地に感激したる人であつた。彼等は老年になつて初めてその事に氣付いた人ではない。人間の出發から知恩報恩の人であり、その知恩報恩の覺悟を貫き通した人である。

四、日蓮聖人の知恩報恩

日蓮聖人の如きは、日本人中の日本人であり、偉人中の偉人であつたというても過言であるまい。聖人の知恩報恩の思想は、その五十歲の時亡くなられた舊師道善御坊の墓前に手向けられた上下二卷の報恩鈔に盡されてある。聖人の出家生活は知恩報恩の外の何物でもなく、聖人の一生涯はその知恩報恩の實際生活であつた。聖人は世の常の如く、父母に常侍して孝養を盡すといふのではなかつた。伊豆流罪後數年の間、母の病を故鄕に見舞うて低徊去るに忍びず纏々の情を示した外、多くは父母と離れて專ら國の爲め法の爲め一切衆生の爲めにのみ送られたのである。從つてその艱難流離の間に、伊豆にあつても佐渡にあつても、乃至身延にあつても父母に寄する恩愛の情は當に拘すべきものがあつた。後年に身延九年の生活を送られて、身延の山高く攀ぢて遠く故鄕房州父母の墓のある邊を望めては、聊か恩愛の情を展べられたのも全く六十にして父母を慕ふといふその大孝の自然の發露である。

聖人の此大孝の精神に感激した人は、その帝都弘通を托された四海唱道日像菩薩である。更に出家しても尙その母に常侍するを忘れず、四十にしても尙赤子の情を以てその母に仕へたといふ深草の元政上人であつた。母を奉じて遙々身延へ詣で、御眞骨堂に『何故にくだきし骨の名ごりぞと思へば袖に玉ぞ散りぬる』と詠歎し、更に奥の院に登りて聖人の往時を追懷し、父の遺髮を埋め、『別有風敎可追慕、瞻望父母陟斯高』と讃歎せるが如きは、報恩文學の最も優なるものであらう。

苦いかな多知の人、諸佛も亦化し難し、德を轉じて心を轉ぜず、萬卷空しく架に滿つ、名利の坑に沈淪して、日夜に驚怕を生ず、中心誠に歸せず、念念巧詐を設く

—艸山集—

大東亞戰の勃發前、榎本少將が私共の爲にお話し下さつたものであります。一般國民の心構に就て大切なことが示されて居りますから、自他共に之が實行を期したいものであります。

國を護る心組

陸軍少將　榎本宮

國防と申しますことは、御承知の通りに元は第一線の軍人に一任されて居りまして、日露戰爭の時あたりは、銃後の人達は唯これが後援をして、第一線の勝利を導いた譯なのであります。それが段々世の中が複雜になり、いろ〳〵文化が高まりまして、此の前の第一次歐洲大戰になりますると、凡ゆる點が大規模になりまして、單に武力戰ばかりでなく、政治、思想、經濟、それ等の戰爭が併せ行はれるやうになりました。ドイツの如きも、武力戰ではズーツと勝ち續けましたが、思想戰、宣傳戰でまた經濟封鎖で臺所から敗れて、前の大戰にはあんなひどい目に遭つてしまつたのであります。つまり此の頃から、戰爭といふものは第一線の軍人だけでなくして、一般の國民がみな國防の荷を背負ふといふことになつた譯であります。又今度の戰爭狀態、今後起るべき事態を考へますると、今まで以上のことになりつゝあるのであります。それをハツキリ認識しなければ、本當に日本國民と生れて國を護ることが出來ないと思ふのであります。それが爲には、日本の國家がそれだけの重荷を背負つて居るのでありますから、それが何から起つたかといふことを知る爲には、先づ第一に世界の大きな動き方、また日本が現に直面して居る仕事、日本が進むべき道、これをハツキリ認識することに依つて、國を護る眞の力を發揮することが出來ると思ひます。それで世界の大きな動き、それに基いて日本がどうなつて行きつゝあるかといふことを、極く概略申上げようと思ひます。

先づ今日の世界の大きな動きの根本になるものは何かと申しますると、これは前の歐洲大戰からズツト起りました所の產業の行詰りであります。と申すのは、歐洲大戰で勝利を占めた所の英・米・佛、これ等の國が非常に都合の好いやうに色々な規則を作りました。隨つてその他の國々は、この英・米・佛がその現狀を維持するために、凡ゆる手段で壓迫されて居るのであります。折角一生懸命に働き、また正しい事をやつて行きましても、伸びることを各方面から壓へ付けられて居るのであります。現に日本もさうであります。つまり日本は國が小さく、資源がありません。隨て日本の活きる道としましては、外國から原料を入れて、日本で發達させた工業で加工して、これを外國に賣り出すより外ないのであります。そこで一生懸命に勉强して、手先の器用な日本人が上手に拵へて、安く賣らうと致しましても、各國の港々で高い關稅をかけてこれを邪魔するのであります。英・米・佛等の國々は、碌に働かないで、自分達の八時間勞働をモツト減らしたりして、さういふ風に樂をして作つた自分の國の品物を高く賣付けようとして、日本の品物はズツト値段が安いのを關稅で高くして、其處に行渡らないやうにしたり、或は又原料の輸出を妨げる。日蘭會商とか、日印會商とか、いろ〳〵日本としては隱忍して相談をしようと致しましたが、彼等は日本に原料をよこさない。さういふやうな方法に依つて、後から進んで行く國を壓迫して居るのであります。また日本が支那と手を握つてやつて行かうといふことにさへも邪魔をして、御承知の通りに到頭日支事變といふものが起つた譯であります。日支事變は、蔣介石が英・米に踊らされて、排日から反日、抗日で、到頭日本に楯を突くやうになつたのであります。初めは日本としては極く小さく、現地解決、不擴大主義といふ風に考へて居りましたが、これがだん〳〵大きくなりまして、到頭今日のやうな狀態になつたのであります。併し日本が支那事變をやつて居る其の根本は何であるかといひますれば、英・米・佛・蘇、これ等の國々の壓迫から東亞の民族を解決しまして、さうして各々其の所を得させようといふ、八紘一宇の精神に外ならないのであります。日本が斯樣な壓迫を受けましたやうに、ヨーロツパに於てはドイツ・イタリヤも亦同じでありましたが、獨伊兩國は遂に起つて既に歐洲戰爭が始まつて居るのであります。

今まで日本としては、支那事變は相當に長い時間がかかる、所謂長期戰の覺悟でやつて行かうと考へて居るところへ、此の歐洲大戰が起つたといふことが、非常な日

本に對する刺戟でもありますし、また覺悟を新たにしなければならないことなのであります。それは何かといふと、歐洲大戰の日本に及ぼす影響であります。それは向ふが片づかない間は、イギリスの蔣介石援助の手が弱くなるから、日本には都合が好い、尤もその代りにアメリカがイギリスの番犬の役を買つて大分出て參りましたが、歐洲大戰の爲に援蔣といふことは大分困難にはなつて居るのであります。けれどもあれが片づいた後はどうなるかといふことは、これは非常に考へなければならないのであります。ヨーロッパでは今イギリス・ドイツ・イタリヤが戰爭して居ります。それが片づくとなると、兵器も、彈藥も、船も、何でも一つの方に合併されるのであります。又合併されるまでに、お互に負けまい〳〵として力を殖やして行きます、ウント殖やして行つて最後にはどつちかが負ける。さうすると勝つた方は非常な大きな力になります。その力で東洋に向つて來るといふことになると、非常に日本としては危險な事なのであります。これは前の歐洲大戰の後にやはりあつたことであります。日本は戰爭に參加はしましたけれども、いろいろな品物を賣つて儲けまして、所謂戰爭成金になつた。その後向ふはあれだけ兵器や何かが發達し、澤山の準備があつたのに拘らず、日本は反對に軍縮とか何とかやつて居りました。それが爲にワシントン會議であの辛い目に遭つて居るのであります。其の外度々ひどい叩き付けを喰つて居るのであります。今度の歐洲大戰でも、日本がしつかりして居らなければ、戰爭の片がついた後で、日本に向つて其の力を用ひないとも限らないのであります。今戰爭をやつて居る最中は、そんなことは毛頭考へません、けれども濟んだ後には必ずそれが來るのであります。今まで支那事變で相當の苦痛を日本は嘗めて居りまして、長期戰に備へるのだ〳〵と言つて居つたのが、急轉回して、數年後に來るべき大きな力に對抗するものを持たなければならないといふことになりまして、玆に更に大きな目標に力を入れなければならぬことになつたのであります。即ち今まで國防に對する一般國民の負擔といふものも相當の重荷ではありましたが、今度の歐洲大戰が起つた爲に、その荷が二倍になり三倍になり、五倍十倍以上にもなつて來たのであります。

それ程になつたにも拘らず、一般の國民は、果して、急に大轉回をしてこれだけの荷を負ふことになつたのだから、自分はこれだけの努力をしなければならぬといふ心組になつたでせうか、どうでせうか。政府は各方面に新體制をつくり、高度國防國家の建設を要求して居りますけれども、それを受ける一般の國民がそこに考を及ぼ

して、「よし、やるぞ」といふ氣持を起さなかつたならば、新體制も、高度國防國家も十分の力を養ふことは出來ないかと思ふのであります。若しそれをしないで「まアどうにかなるだらう」といふやうな考で居りましたならば丁度今度の歐洲大戰で、フランス人が、いろ〳〵な點で自己滿足をして用意を怠つて居た爲に、ドイツから一たまりもなくやられてしまつた、その轍を踏まなければならぬやうになるのではないかと思ふのであります。つまり僅かこの一二年の間に、國を護るといふことに就て、一般の國民の肩に懸つた重荷といふものは、非常に重いものを持たなければならない。また重いものを持ちながら、大きな仕事をやつて行かなければならないといふことになつたのであります。

さてそれだけの力を養ふにはどうしたら宜いかといへば、結局高度の國防國家を作り上げることなのであります。それには日本だけ如何に立派にしましても、これを資源の上から見まして、或は經濟の上から見まして、また戰爭の方面から見ましても、日本だけでは駄目なのであります。といふのは、戰爭に必要な資源が單に日本だけでは十分ではないのであります。滿洲と兄弟國になりまして相當よくなりましたけれども、まだこれでも駄目であります。北支那だけでも駄目であります。支那を全部合せました日滿支でもまだ足りない所があるのであります。そこで更に南の方へ伸ばして、所謂大東亞共榮圏といふものを作り上げなければならないといふことが、この歐洲大戰が始まつた後に起つて來たことであります。さうしてその事の順序はどういふ風に行きますか、それをよく考へますると、國家を護る若い人々の心の根本がしつかりするだらうと思ふのであります。以上申上げたことが、時局の遷り變りに應じまする所の一般國民の覺悟の根本であります。

そこで日本の國防國家といふものは、それではどんなものかといふことになりますが、此の國防國家は單に日本だけでなく、ドイツでもやつて居ります、イタリヤでもやつて居ります。又イギリスでもアメリカでも皆やつて居ります。それは其の國々に依つて皆違ひますが、日本の國防國家といふものは、其の根本が、日本の昔からある道義的と申しますか、即ち滅私奉公の考で作り上げる所の國防國家でなければならないのであります。さうして歐米文化と一緒に入つて來ました所の自由主義とか個人主義とか、或はデモクラシー思想でないところの考へ、つまり日本の國體に基いた考へ、教育勅語にあります所の皇運扶翼、その考で國防國家は作られるものだと思ひます。滅私奉公といふことは、戰場に在る軍人はみ

なやつて居ります。みな命を投げ出してやつて居るのであります。それは戰爭に出れば、何處の國の軍人でも命を的に戰ない者はないのでありますけれども、外國人はまた外國人で違つた考を持つて居ります。

天皇陛下の御爲に戰ふといふ風な日本人の考と、外國人のやうに、自分は國を護る義務を有つて居るから戰ふといふのでは、そこに違ふ所があるのであります。日本人は死んでもやります。ところが外國人は、或る程度努力を拂つたならば、我は義務を果せり、それで終りであります。例へば或る山を守つて居りましても、かなりの間敵の攻擊を防ぎ止めたならば、吾々は義務を果せり、さうして降參しても手を擧げても、これは外國ではサウ罪にしないのであります。日本の軍人だつたらそんな事では決して捕虜になりませんし、死んでも其處を守りまするが、外國人はそこに相違がある。といふのは國の成立が違ふからであります。つまり國體が違ふからであります。滅私奉公、一切を捨てゝ、大君に盡すのでありますから、軍人として强い。何處の國の軍隊もこれに敵はない、世界第一の軍隊が生れるのはそこから起るのであります。

どうも外國人は、支那人でも、何處の國の者でも、命を投げ出してやるといふことは、口では言ふけれども中中やりません。私はよく話すのでありますが、今度の支那事變で初めに海軍の陸戰隊が守つて居りました。支那側に比べますと隨分數は少いのでありますが、それを相手が攻擊して參ります。極く近くまでやつて來ますけれども、劍を著けて自分の身を投げ出して突込んで來ることは滅多にないのであります。近くまで來て手榴彈を投げる、そこまでは來ますが、最後の突擊といふことは中中やらないのであります。それでこつちは少數でも守れるのであります。また飛行機でも、ノモンハンで敵の飛行機を三ケ月ばかりの間に千何百機墮して居ります。これもやはり日本のはぶつかつてもやるのであります。向ふはぶつかるのは厭だといふ。戰場で命を賭けての戰と單に義務でやる外國人のやり方と、そこに違ひがあるのであります。斯樣に滅私奉公の精神は、非常に强い力を現はすのであります。

そこで第一線に立たない一般の皆さん方も、この非常時、否、非常時以上の非常時に大きな力を出すには、やはり滅私奉公の心組で、第一線の將兵の心を心とする、それを本として初めて大きな事が出來るのであります。この滅私奉公の誠に依つて立派な高度國防國家を完成しまして、次いで來りまする所の世界の大變局に毅然として立つだけの力を養はなければならないのであります。

此の頃レコードなどに吹込まれて居ります戰陣訓にも、『身心一切ノ力ヲ盡シ、從容トシテ悠久ノ大義ニ生クルコトヲ悅ビトスベシ』つまり滅私奉公といふことに付て斯ういふ風に論して居ります。何れにしても滅私奉公でやることに依つて、初めて大きな力を生み出すことが出來るのであります。自我功利が許されて居る間はいけません。ところが今日實際の有樣を見ますると、まだ／＼それが殘つて居るやうであります。例へば闇取引が行はれる、金動員がなか／＼集まらないで、貯蓄々々と言つてやつて居るやうな狀態であります。滅私奉公の誠を盡す爲には、正しいと思ふ事を眞心を以てやつて行くことであります。眞心でやつて行きますれば、必ずこれは人に通じ、天に通ずるのであります。至誠天に通ずであります。よく申しますが、貧者の一燈も眞心を以てやつたならば、長者の萬燈にも勝る。實際至誠ほど大事なものはありません。さうしてイザやつて行くといふ爲には、斯うやらうといふ信念を固めなければならない、その信念を固めるのは正しい道なのであります。先程からお話がありましたやうに、所謂立正安國、このやり方で行けば間違はないのであります。

之を要しまするに、國を護る心組、卽ち國防に對する國民の一般心構へが、この一二年の間に非常に變つて來たといふことを十分に認識しまして、さうして世界の變局に對應するやうな大きな力を拵へ上げる組織、所謂新體制に、皆さんが心から滅私奉公、誠の力で奮鬪して戴くやうにお願ひする次第であります。

（完）

伊勢神宮

金城三郎

神路橋渡る人々多ければ
いよいよ固し國の護りの
いすゞ川伊勢の大神のおんまへに
われつゝましくひれ伏し祈る
日の本を肇め給ひし國津神
遠つおほ親おろがみまつる
大神のへに額づきて經を誦す
今日のこの幸を子等に傳へん

優婆塞戒經要解（其五）

本多日生

自利利他品第十

菩薩、自他兼利する能はず、唯自利を求むる是を下品と名く。何を以ての故に、是の如き菩薩は法財の中に於て貪著の心を生ず、是の故に自ら利益すること能はず。行者若し他をして苦惱を受けしめ自ら安樂に處す、是の如き菩薩は利他すること能はず。

善男子よ、利益に二あり、一には現世、二には後世なり。菩薩、若し現在の利益を作さば是を實と名けず、若し後世を作さば則ち能く兼利す。

菩薩摩訶薩一法を具足すれば、則ち能く兼利す、謂く不放逸なり。復二法あり能く自他利す、一には多聞、二には思惟なり。復三法あり能く自他利す、一には衆生を憐愍し、二には精進を勤行し、三には念心を具足す。

凡そ所說あるには十六事を具せよ、一には時說、二には至心說、三には次第說、四には和合說、五には隨義說、六には喜樂說、七には隨意說、八には不輕衆說、九には不訶衆說、十には如法說、十一には自他利說、十二には不散亂說、十三には合義說、十四には眞心說、十五には說き已つて憍慢を生せず、十六には說き已つて世報を求めず。

是の如きの人は能く他に從つて聽かん。

他に從つて聽く時、十六事を具せよ、一には時聽、二には樂聽、三には至心聽、四には恭敬聽、五には不求過聽、六には不爲論議聽、七には不爲勝聽、八には聽時說者を輕しめず、九には聽時法を輕しめず、十には聽時終に自ら輕しめず、十一には聽時五蓋を遠離す、十二には聽時受持讀誦の爲にす、十三には聽時五欲を除かんが爲にす、十四には聽時信心を具せんが爲にす、十五には聽時衆生を調へんが爲にす、十六には聽時闡根を斷ぜんが爲にす。

菩薩摩訶薩利他の爲の故に先づ外典を學び、然して後に十二部經を分別す。

菩薩若し衆生の爲に法界の深義を說かんと欲せば、先づ當に爲に世間の法を說き、然して後に乃し甚深の法界を說くべし、何を以ての故に、化し易きが爲の故なり。

これも矢張り實義の菩薩の態度でありますが、心が唯堅固であるばかりでなく、その働きは自利と利他の心である自他兼利といふのであります。利他といつても自己を全く沒却しては、本當の力はない、又單に自利心の爲にする菩薩は劣等である。何故かといへば斯の如き菩薩は、法財といつて世間の金錢でなくして、教に就ても、その教の爲に『貪著の心を生ず』即ちそれに囚はれる、自分が法に執はれてしまへば我見が生じて來るから、一寸誤ると害毒を流す、人を苦めて自分のみ安樂に居らうといふやうな者であれば、利他は少しも無い。さういふ事を戒めて、實義の菩薩は飽くまでも佛法を大切にするけれども、法に執はれて衆生濟度の本質を失はぬやうにする。又自分の幸福の爲に人を苦めるといふやうな事をしない、隨つて人を利益するに就ては、唯現在ばかりでなくして現在を利する以上に後世を利する。則ち兼利すで、現在から未來に貫いて行かなければ、菩薩の救濟とはならぬ。現在だけでもいかぬ、未來だけでもいかぬ、『能く兼利す』であらねばなりませぬ。

併しその兼利することは、非常に難かしい働のやうであるが、自分も利し、人をも利するといふ事は、なか〳〵出來ないやうであるけれども、一つの事に依つて出來る、それは横着しないで一生懸命になつてやらうといふ奮勵努力があれば、その中から自利利他を滿足する事柄が現れて來る。一般佛教徒のやうにヌラリクラリして居つて、精進が

缺けて居るから自らも困るのは、是は當然である、奮勵努力さへすれば、自利と利他が必ず得らるのである。法華經如來壽量品には『放逸にして五欲に著し惡道の中に墮ちなん』と示されてゐる。方便品のやうに『勇猛精進して名稱普く聞へたまへり』といふことにならねばならぬ。

又次に二つの方法に依つても得られるが、その場合は、多聞と思惟とである。能く佛法の教を聞いて、而して廣くその義理を考へて行くやうにすれば、それに依つて自利利他を滿足することが出來る。

又三つの方法に依つても出來る、それは衆生を憐れむことゝ、精進の行と、いま一つは念心といつて佛を念じ法を念ずることである。『念心』を單に自分の心を觀ずるといふやうに思つては間違ふのである、鏡があつてこそ自分の姿が映されるのであることを知るべきであります。要は斯ういふ宗教の信念を失はぬやうにして行くことであります。

次には說法する者の心掛くべき事の十六箇條を說かれ、又法を聽く者の心得十六箇條を說かれて居る。それはこの文にある通りの事で、法を說く者の心得としては、『時說』能く時に適するやうに話をしなければならぬ、日蓮聖人は『時を知るを大法師となす』と仰せられて居る。それから說法をする時には、一生懸命にやらなければならぬ。それからチヤント話の順序が立たなければならぬ、後になつたり、先になつたりしてはいけないといふやうな事に就て十六箇條の說法者の心がけを說かれてある。

次に聽衆の方の心得十六箇條は、時を以て聽くやうにとか、聽かんことを樂へとか、ねんごろに聽けとか、或は說く人に尊敬を拂はなければならぬと、いろ〳〵さういふ事を十六箇條揭げてあります、實に是はよい事であります。

それから菩薩は他を救ふ爲には、唯佛教だけやつて居つたのではいけない、佛教以外の知識を得なければならぬ。所謂倫理、哲學の如きを學んで、それから後に自由に佛教を分別して行かなければならぬ。これは何の爲かと云ふと、佛法を人に解らすやうにするには、唯だ佛教だけやつて居つたのでは、世間の知識と繋りが取れないことがあるから、矢張り社會にある學問をやつて、而して佛教を教へて行かなければならぬ。併しその學問に囚はれて、佛法を忘れてしまふといふことは詰らないことであります。

それで大勢の者に『法界の深義』即ち佛法の妙理を說かうと思へば、先づ世間の事柄を說いて聞かして、それから後に深い道に導くやうにしなければならぬ、何故かといへば、それが解り易いからであります。

是は佛教徒として衆生を導く方法を示されて居るので、古い坊さんが、何だか解らないやうなことをいつて居るのは駄目である。又新しい坊さんが、新しい事をいつても、それが解らないやうな事をいつて居るのも駄目であります。ア、いふ事でまご〳〵するのは、是等は佛教の初門だも讀まない者で、無學なるものであります。よい加減なことで誤魔化して置くといふことは、不都合なことである。世間の事を知らないで、世の人々を導くことは、いつの時代でも出來ないのであります。

勅題　連峯雲　　本郷日常

連ねる峯にひろごる叢雲を
はらひて立てる不二の神山

悲母を偲ひて

とことはの眠につきし亡き母を
思へば悲し涙せきあへず
朝な夕な語りし母の在さねば
淋しさに身の置きどころなし

四方の國翼を連ね攻めくるも
我が鐵石の陣は動かじ

記事

本部團報

興亞奉公日　第二十八回の興亞奉公日を早朝六時十分講堂に於て營んだ、毎月一日拂曉連續してこの淸集を催しお互の精神作興に勇猛精進致して居る早起勵行でモット時間を早くからと思ふのであるが、市電の始發が五時半となつてより、吾等にとつては十分に活用出來難くなつた、能ふ範圍に於て最善をつくせば宜しからう。そこで本年も最終の月に當るからして先づ國體會皇軍完勝並に陣歿諸靈の追福回向を營んで後、礒部理事より『國と敎』の關係に就て、文部省から出されてゐる『國體の本義』を演釋し、大に國體の明徵と共に敎法の精華『日蓮法華』の卓越を高調し　國と敎の不離冥合を力說された。時間は短かいが、それ丈けに簡結にして直ちに印象付けらるるに寧ろ効率的と思はれて嬉しかつた。

幹部會　十二月七日の第一日曜日午前十一時より本部に於て幹部會を開催して上田理事長始め各理事、敎務の諸氏、時局と敎化に就て重要な協議を練つた。

今こそ國民は眞に人格を向上せねばならぬ、增稅に焦慮してデパートが賑ふといふやうなことではなるまい、各自が菩薩の願行にたつて四無量心、六度の幾分でも實踐にうつすことである苦難を苦難とせず、歡悅に醉ふことなく、大香象の流を切るやうな態度で堅實に一歩々々と大目的に前進することそれには先づ自分の性癖を改善せねばならぬ、此の持つて生れた性分を改めるといふことは、世間普通の倫理道德位では不可能とされてゐる。どうして過去・現在・將來の三世を一貫した偉大な宗敎信仰の力に俟たねばならぬこの根本から樹て直らねば底力は出ないであらう。徒らに世の利衰毀譽褒貶苦樂に左右さるる樣では、大業の完遂は難事と思ふ。破壞は易く、建設は難しい。正しい信仰の力に元品の無明を打切つて、光輝ある日常に勇躍精進する風潮を天下に捲起すことが吾人忠なる所以と信ずる。聖日蓮は『世を安んじ國を安んずるを忠となし孝となす』と叫ばれた、大きな世界の動亂の中に於て、最早や前線も銃後も劃然と別けらるべきであるまい、すべてが戰士である、皆悉く第一線に健鬪してゐるのである、その動の中に靜があり、靜の中に動があるのである。今こそ男も女も、老も幼も各自の一擧手一投足は、直ちに世界の隅々へ轟き渡るのであるから丈に自重すべきである、戒心すべきである。今こそ法華經の兵法を用ふべきである、團員各位の發奮を切望いたす次第である。

御成道會　臘月八日は、大聖釋尊の八相示現の中の大切な御成道の聖日に相當する。本部では七日の日曜午後二時、莊嚴された御寶前に、和賀師を中心に一同至心に法味を捧げ、且つ皇威宣揚、將士武運長久並に陣歿精靈の菩提回向の後、河合講師より『人類生存の目的』と題して約二時間に及んで熱辯を振ひ、感銘を深からしめた。日足しの短かい季節であるから、後は質疑應答と懇談會に活用し、六時頃餘香盡きざる中をお別れした。

婦人會　毎月二回のはちす婦人會は益々信行增進、法悅に溢れつ、又他へも展轉され、かくれた功德を植えられてゐる。いつもの例會は勤修後　礒部先生から壽量品を中心にして有難いお話を下さるのですが、先月の第二回目には、最近上海から歸京された宮島さんより、種々耳新らしいお土產話を承つて、一同大喜であつた。彼等の民族性や慣習を知ることに於ては表面ばかりでなく、婦人側からも細々しい觀察に依つて窺ふのは緊要事と思ふ。實際彼等を善導し心から歸伏せしめることは、充分當方の人格が崇高であらねばなるまい。左手にパンを持ち、右手に杖を持つて敎導すべきだと或る人は申してゐるが、其の根本には慈悲心の旺溢を以て包容美化することが我肇國の叡慮と拜する。一般の婦德としては慈悲が盲愛に陷り易いのである、そこで正しい信仰の力によつてこの慈悲と智慧とが併進して完全な人間味を發揮される、所謂『信は道の元、德の母』であり『八萬寶藏の第一法』である、『行學の二道は信心よりおこるべく候』と日蓮聖人は示唆されてゐる。お互に勵み合ひたいものである。

信行會　毎週月曜日晨朝、同心會、酒稅立正產業報國會等の諸員に滿された力强い、活々した勤修と、礒部理事の優婆塞戒經講話が繼續されてゐる。去十二月八日の朝はこの信行會に於て御成道會を嚴修し、釋尊の積功累德を鐵仰し、降魔成道の要綱を說述嘆美し一天雲なき快晴の大空を見上げたのであつた。

不思議な程麗かな東天が燃えたつ樣に輝いてゐる、近來にないみ空の模樣を拜した。約二時間後にアツといふニュースが人々の耳を驚嘆せしめた、成る程我が日章旗が一度天空に輝けば、彼れ星條旗の消失するは自然の道理である。これに就て憶ふことは、日蓮聖人が建治の昔、佐渡の國より弟子共に內內申す法門がある。此の法門が出現するたらば、正法・像法時代に論師や人師の申した法門は、皆日の出て後の星の光であると、三澤鈔に仰せられたことで、妙法蓮華經の法門こそ萬年の闇を照らす太陽である。卽ち日蓮聖人以後に於て、此法門を破折した宗敎家はない。近頃福田とかいふ男が、皇道日報に、日蓮聖人御遺文の字句を弄して思想攪亂を企てたが、宗敎を辨へず佛敎を知らずして徒らに世間を騷がさんとする毒蟲である、還著於本人とい

ふことに心付かないものか、悲れ慕ないものである。併しやがてはこの逆緣から救はるることもあるであらう。

嗚呼、十二月八日の御成道の聖日は事理共に永久に記念さるべき感謝の日であつた、彌々勵むべきである。

福島支部報

高商鑽仰會の幹事金原・德永・橋本の三君には十二月目出度く卒業され、夫々産業界の第一線につかれることになつた。よつて十一月二十九日午後四時大町中村樣方に於て三君の送別會を催した。

此日特に磯部先生の御臨席を忝うしたことは一同感激に堪えない次第である。北支の福岡先輩並に橋本先輩も列席された。開會に當り二年生中村忠司君起つて送別の辭を述べ、內外共に多事多難なる時代にあつてよく會の維持發展を計られたる三年生諸君の法勳を讃え、卒業後も會の發展の爲め御助力されんことを請へば、卒業生を代表して金原君が丁重なる謝辭を以て報へられた。次いで磯部先生がいつもの溫顏に微笑を湛えられ極樂百年の修業は穢土一日の功に及ばず、かかる困難なる時代によく會の爲めにつくされたる三君の功德は永久に朽ちないものであり今後共信念を增長して國家の爲め、社會の爲めつくされ度いと諄々たる御教訓を賜つた。又福岡先輩は極めて力强く、自分の今日在るは全く信仰のお蔭であるとて銃火の下をくぐられたる尊い經驗を通じてのお話には一同深い感銘を與へられた。それから中村おば樣の御好意による御馳走を頂き乍ら一同和かな歡談を交はした。福岡さんの話はめつたに聞けないと計り一同の質問は福岡さんに集中した。今回の送別會がかくも盛大に開催されたことは磯部先生、福岡先輩並に中村おば樣の絕大なる御助力によるものであり、厚く感謝申上ぐる次第である。

次いで七時より支部の例會に移り法要後、先生の壽量品講話、福岡氏の感想談あり、久々にて見えた原田・夏谷泰次郎兩氏をかこんで和やかな座談の後、お題目を三唱して散會した。

萩教信

統一團萩支部の中心であつた故小高先生の第五七日忌に當り、行學會有志主催の追悼會が、椿東區の先生のお宅で營まれた。本部から磯部先生が時局柄萬難を排して遙々御來會下さつたことは一段と有難い何よりの法筵であつた。十二月九日晩、燈火管制の暗い道しかも冬雨瀟々として降るにも拘らず先生のお德を慕ひ、お忙しい增野院長や水津御夫妻、又小島先生等御參集誠心こめて富元上人御導師の下に、御回向御燒香させて戴いた。

法要後に先づ磯部先生から、御遺族を對告衆として『老死』といふ人生の一大事に就て、祖書經文に基いて御懇說され、小高先生の法勳を稱へられ、御遺族の重任と、今後力强く活きらるるやうに囑望された。富元上人は小高先生の求道心の熱烈なこと、而してそれは推理的であること、又知行合一の實踐に就てこんな事實を話された。或る時の例會に顯佛未來記の一節『幸ひなる哉、一生の內に無始の謗法を消滅せんことよ、悅ばしい哉、未だ見聞せざる敎主釋尊に侍へ奉らんことよ、願くは我を損する執權等をば最初に之を導かん、我を扶くる弟子等をば釋尊に之を申さん、我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を進めん……』と拜讀して不圖小高先生を見た處が、席に見えない、やがて復歸さるることと別に心にも留めずにゐたが、閉會の時にも見えないから、お宅の方へ電話したがお歸りになつてゐない、サア一同は心配してドーされたか、何處に行かれたかと大騒ぎとなつたが、遂に二三日は不安のうちに過ぎた。やがてヒョツコリ來られた。それは先生の親御が岡山の田舍に居られるのに、これ迄は念佛宗で居られたのをそのままに不問視されてゐた。それが今 大聖人の御書に『我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を進めん』の一句を聞かれて、自分は未だ親達を改宗せしめてゐない、これは大不孝だと心付かれるや、そのまま直ちに鄕里に向はれたのであつた。萬事がこんな鹽梅なんで、實に純情の高士でしたと歎德された。

續いて增野院長は、小高君は自分と同窓ではあつたが、昔しは級も違ひ、離れて居たし殆んど知らなかつたのでしたが、其後二人がこの萩で同職の關係上知るやうになり、御人格の立派な方だとは思つてゐたのでしたが、ある時小高先生の中學校時代の苦學狀態が山陽新報に揭載されてゐるのを見て、更に先生を見なほしたのでした。それから又先生の日蓮聖人鑽仰の態度を見聞するにつれ、モー一度先生を見なほして益々その御人格の崇高なのに敬服してゐたのです。私も隨分忙しいものですから、先生から法華經の話を聞かせて貰はうとし、先生も話さうと申されてゐたのでしたが、その機會は得られなかつたのでした。偶々先年、私が病臥で二回就床の砌りに泌々と先生から法味を戴きました。而して大に啓發されました。然るに自分は眞宗のあるお寺の總代でしたが、先生のおかげで斷然改宗致しました、先生の逝かれた今日、私は相當責任觀を感じてゐますと、いろ／＼先生の中學時代の苦しい場面をお話になりました。小島先生は是非この行學會に於て、小高先生の言行錄を殘して置きたいものです。宗教信仰の上だけでなく、その若い時代の奮鬪努力は、今日の青少年に大きな活訓を與へませう。立志傳中の雄であります。而かも自分には慈父であり悲母のやうな溫情の先生でした、又敎學

の上にかては斷然一頭地を抜いて居られました。先生は往診の時なども、車上で書見を怠られた日はありませんでした、何日いかな時でも先生の手には御本が展開されてゐました。これは此の萩では市民の悉くが見てゐる萩名物の一つであります。私は先生に依つて精神的にも肉體的にも救はれたものであります。私の子供も先生によつて救はれました、一家の大恩人でありますと小島先生は靜かに感慨深く述懐され、いかにも殘念相な御樣子でした。

未亡人も主人は、朝早く顏も洗はないでよく書見致してゐました。患者の方が門前市をなすといふ位に多數に來られまして思ふ樣に讀書の暇もなかつたので、氣付いた時は夜でも夜中でも時間構はず本箱の前に坐つてゐましたと懐しさうに書齋の方を見られた。

それからそれへと追憶談に華咲いて時のふけ行くを忘れた。折柄增野先生に急患者のお迎へが來たのを機會に一同も名殘り惜しく、唱題の餘韻を留めて辭した。小島先生は獨り止まつて、それから時餘礒部先生と法談を交へられ、今後一入精進して報恩に擬したいと、闇の夜寒むにも、希望に充ち滿ちたお姿で門を出られた。

小高先生の意外の御逝去は、痛切な大打撃を私共に與へられました。併しこれが動機となつて必ずお互は協力して正法護持に全力を竭したい、これが先生に對する一番の御報恩と思ふ。

仰ぎ願くは　佛祖三寶證知照覽、新圓寂　本壽院長遠日常居士佛果增進南無妙法蓮華經。

團費誌料維持費及寄附金領收（自十一月二十一日至十二月二十日）

一金拾圓也	東京	五味季六殿	
一金貳圓四拾錢也	三重縣	古市二郎殿	
一金貳圓五拾錢也	横濱	西村喜勢殿	
一金貳圓五拾錢也	福島	國分文子殿	
一金貳圓五拾錢也	同	遠藤カツ子殿	
一金貳百圓也	靜岡	福岡駒雄殿	
一金五圓也	奉天	有吉市六殿	
一金貳圓貳拾錢也	大阪	新見世間音殿	
一金拾圓也	東京	山田英二殿	
一金參圓也	東京	宇野博順殿	
一金壹圓也	福岡縣	大久保久市殿	
一金貳圓貳拾錢也	彦根	林田義夫殿	
一金參圓也	東京	多田房太郎殿	
一金拾圓八拾錢也	大阪	吉永日洋殿	
一金五圓也	千葉縣	片岡盛助殿	
一金貳圓五拾錢也	府下	岩崎清八殿	
一金貳圓五拾錢也	岡山縣	金森義男殿	
一金壹圓貳拾錢也	大阪	大瀨伊太郎殿	
一金壹圓貳拾錢也	同	澤田萬壽穗殿	
一金參拾圓也	東京	横山正三殿	
一金貳圓五拾錢也	川越	高山春男殿	
一金貳圓貳拾錢也	上海	種村美加夫殿	

右難有入帳仕候也

（以是領收證代用）

財團法人統一團會計

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
○御申込ハ總テ前金ノ事
○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
○御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共ニ御通知ノ事

昭和十六年十二月二十七日印刷納本
昭和十七年一月一日發行
（第五百六十二號）

編輯兼發行人　東京市小石川區晉羽町六ノ十七　磯部滿事
東京市四谷區内藤町一
印刷人　山田英二
東京市小石川區晉羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所　電話牛込六九六六番

（不許複製）

發行所　東京市小石川區晉羽町六ノ十七　財團法人統一團　電話牛込五三三六番　振替東京九四二〇番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

念告

謹みて
大東亞戰役陣病歿勇士の英靈
を弔し
歲末年始の禮を缺く
南無妙法蓮華經
皇紀二千六百〇二年壬午元旦

財團法人 統一團
幹部一同

左記の通り本部に於て新年國禱會完勝祈願並に慰靈祭相營可申候間奮つて御參列相成度候

左記

日時　一月七日午後二時開會
行事　勤修
　　來賓感話
　　懇談會
會費　金五拾錢也

以上

財團法人 統一團

⊙元旦午前九時、元朝會。
⊙一月六日より三十日間、毎朝六時十五分、立正寒修行會。
妙法蓮華經開結御持參の事、但便宜上本部にも用意有之

統一
明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十六年十二月二十七日印刷納本
昭和十七年一月一日發行（毎月一回一日發行）
第五百六十二號
第四十七年　一月號

目次

三教の特色と其調和（中）……本多日生
本尊問題に就て……小林一郎
本佛實在の宗教哲學（八）……河合陟明
記事
○本部團報　○產報會記　○入帳報告

明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十七年一月二十七日印刷納本
昭和十七年二月一日發行（毎月一回一日發行）
第五百六十三號
第四十七年　二月號